

# イコム大会報告書

(第23回 ブラジル・リオデジャネイロ大会)

平成26年3月

イコム日本委員会



## はじめに

第23回イコム大会が、ブラジルのリオデジャネイロにおいて、2013年8月10日から8日間にわたって開催された。大会テーマは、Museum (Memory + Creativity) = Social Change であり、主会場はリオデジャネイロ郊外のバーハ地区に新設された Cidade das Artes (芸術の都市) であった。参加者は世界103ヵ国から約2千人と発表されているが、この中には、私を含め日本からの参加者30人が含まれている。

本報告書では、第I部においてリオ大会の日程や決議など、概要を紹介し、第II部では、国際委員会等を中心に大会参加者のレポートを掲載している。また、第III部として、イコム規約や職業倫理規程等の基本的な文書類について、イコム会員である河野哲郎氏・五十嵐耕一氏の協力によって作成された日本語訳を収録している。ご活用いただければ幸いです。

平成26年3月

イコム日本委員会

委員長 青木 保

# 目次

はじめに

## 第Ⅰ部 第23回ブラジル・リオ大会の概要

1. 大会日程	.....	1
2. 諮問委員会、総会等における議論の概要	下田 重敬 .....	2
3. 役員選挙の結果（第28回総会）	.....	12
4. 第23回イコム大会決議	.....	13

## 第Ⅱ部 第23回ブラジル・リオ大会に参加して

ICOMリオデジャネイロ大会に参加して—大会全体に関する所感	白原由起子 .....	19
IOCM リオ大会 2013 大会決議をどう読むか	水嶋 英治 .....	21
地方博物館国際委員会(ICR)における発表と同委員会に関する所見	五月女賢司 .....	23
大学付属の博物館とコレクション国際委員会(UMAC)のセッションに参加して	福野 明子 .....	26
リオ大会の公式ツアー(Historic Rio)について	小島 道裕 .....	29
第23回 ICOM リオデジャネイロ大会に参加して		
まぼろしの特定地域のセッション—ラテンアメリカ	南 博史 .....	30
JAPAN ブースの設置について	半田 昌之 .....	33
委員会点描	.....	35
CIMUSET (折原守・亀井修・川岸哲也) / COMCOL (白原由起子) /		
ICAMT (白原由起子) / ICEE (五月女賢司) /		
ICMAH (神庭信幸・小島道裕) / ICME (五月女賢司) /		
ICOM-CC (神庭信幸) / NATHIST (折原守・亀井修・川岸哲也) /		
ICOM-ASPAC (栗原祐司) / Blue Shield (五月女賢司)		

## 第 I 部 第 2 3 回大会の概要



# 1. 大会日程

会場：リオデジャネイロ・バーハ地区  
Cidade das Artes（芸術都市）

2013年8月11日（日）

9:30～12:30 第77回諮問委員会  
13:30～15:30 国内委員会・国際委員会ミーティング  
15:30～16:30 第77回諮問委員会（つづき）  
16:50～18:50 決議起草のためのオープンフォーラム

8月12日（月）

9:00～9:50 開会式  
10:10～11:00 基調講演  
12:10～17:00 博物館見本市  
13:30～16:40 各国際委員会による会合  
19:00～23:00 オープニング・パーティ

8月13日（火）

9:00～15:30 各国際委員会、地域連盟等による会合  
9:00～17:00 見本市の開催

8月14日（水）

9:00～15:30 各国際委員会による会合  
15:50～16:40 基調講演

8月15日（木）

9:00～16:40 各国際委員会による会合  
9:00～13:30 博物館見本市の開催

8月16日（金）

終日 博物館施設の視察

8月17日（土）

9:00～11:30 第28回総会  
11:30～12:30 閉会式  
14:00～15:50 第78回諮問委員会  
17:00～23:00 お別れパーティ

## 2. 諮問委員会、総会等における議論の概要

日本博物館協会事務局長 下田重敬

2013年8月10日から17日まで、第23回イコム大会及び第28回総会等がリオデジャネイロで、芸術都市（Cidade das Artes）ビルをメイン会場として、「博物館（記憶と創造）は未来を作る（Museums (memory+creativity)=Social Change)」を基調テーマとして開催された。

博物館には歴史的な資料を保存し展示する「記憶」の機能があるが、これによって人々の「創造」を刺激する機能もある。このテーマは、これらの機能を通して社会と積極的にかかわり、人を育て、新しい未来を作ることに貢献したいという思いが込められているものである。

南米での開催は、1986年のアルゼンチン・ブエノスアイレスでの第14回大会以来の2度目であった。今大会には、103か国から約2,000人が参加し、諮問委員会や総会、基調講演といった全体会合、約30の国際委員会による個別の会合が開かれた。

日本からは、青木保・イコム日本委員長（国立新美術館長）、銭谷眞美・日本博物館協会会長（東京国立博物館長）をはじめ約30名が参加し諮問委員会や総会等への出席、各国際委員会での事例発表が行われた。

なお、大会と並行して8月12日から15日まで開催された博物館見本市には、38の博物館関係団体等によるブースが出展されたが、我が国からは日本博物館協会が中心となって、初めて「JAPAN」ブースを出展した。これは、公益財団法人カメイ社会教育振興財団から助成が得られ、また、(株)丹青社、(株)トータルメディア開発研究所及び(株)乃村工藝社から協賛・協力をいただいた賜であった。

---

### I. 第77回諮問委員会

大会及び総会に先立ち、第77回諮問委員会が、8月11日午前9時30分から午後0時30分の間に開催された。諮問委員会は、各国の国内委員会の委員長、国際委員会の委員長、地域連盟の委員長、加盟機関の委員長（又は指名された代表）により構成されるもので、日本からは、青木館長外が出席した。私は、オブザーバとして出席した。

まず、委員長であるノルウェーのKnut Wik（ヌート・ウィク）氏による開会挨拶、前回委員会以降の物故者への黙祷が行われた。

次いで、イコムのパートナーである国際文化財保存修復センター（ICCRUM）のプロジェクト・マネージャーKatariina Simila氏が紹介され、同氏から相互協力、相互理解が重要であるなどの挨拶がなされた。

また、世界博物館友の会連合（World Federation of Friends of Museums）の会長Daniel Ben-Natan氏が紹介され、同氏から200万人の会員・ボランティアの重要性、役割、活動等について、さらに、2007年にイコムとの間で交わされた相互協力に関する覚書

(Memorandum) の更新予定等について報告がなされた。

その後、議事次第案が承認された。

そして、議長により定足数が達していることが確認され、議事に入った。

#### 議題 1 前回議事録の承認

はじめに、前回議事録が全会一致で承認された。

#### 議題 2 新委員の紹介

青木館長を含む新たに就任した全委員が立ち上がり、紹介を受けた。

#### 議題 3 イコムの Hans-Martin Hinz 会長による、事務局問題の最新状況報告

執行委員会の委員に対して、事案関連職員の事情聴取を要請し、その報告を 2 月に受けたこと、4 月に事務総長及び管理・財務部長を解任し、年末までを任期とする暫定事務総長 Hanna Pennock 氏を採用したことが伝えられた。また、執行委員会が事務局の組織化を検討するワーキンググループを設立し、年末までには事務局を刷新するとの説明がなされた。

出席者から、「前事務総長に対して法的措置は執られたのか」との質問があり、「執っていない。」との回答及び説明がなされた。また、「執行委員会は、イコム会員にもっと適時的確に報告すべきだ。」「新事務総長は、将来どうなるのか。」などの質疑応答が行われた。

#### 議題 4 執行委員会の選挙：手続き・組織

選挙管理委員会委員長 Carina Jaatinen 氏（イコムアイルランド委員長）と諮問委員会副委員長・選挙管理委員 Kwame Sarpong 氏（イコムガーナ委員長）から、執行委員会委員の選挙、諮問委員会委員長・副委員長の選挙に関する手続き、組織、日程について報告が行われた。

執行委員会委員の選挙の立候補者が、締切後の申請者も含め 25 人だったが、当初は 22 人を有資格者としたこと、その後、締切前の申請で署名が空欄だった者の扱いなどについて疑義が生じ、検討中に前事務総長、管理・財務部長の解任などもあり、結局、従前のルールに明確な規定がなかったことから、25 人を公平に扱い有資格者とする対応を採ったこと、投票結果は 8 月 17 日の総会において発表されることが説明された。

#### 議題 5 諮問委員会委員長の選挙：手続き、電子投票手続き

Knut Wik 委員長から、選挙は 8 月 13 日と 14 日に行われること、選挙結果は第 1 回投票で決まれば 8 月 14 日、第 2 回投票が必要となれば 8 月 17 日に発表されることが説明された。

選挙管理委員長から、副委員長の立候補は土曜日まで受け付けることが案内された。また、委員長選候補者（Suay Aksoy:CAMOC 委員長、Janrense Boonstra:イコムオランダ委員長、Stephen Cannon-Brookes:ICAMT 委員長）による各 5 分のプレゼンテーションを行うとし、退室・待機・順番での実施を要請した。

#### 議題 6 2012 イコム会員年次報告

イコム事務局 Dora Eszter Peter 会員課長から、直近3年間の国・地域別の個人・団体会員数の増減が報告された。

また、執行委員会により、1991年に創設されたイコム基金と、2011年のケニア、ハイチのような財政問題を抱えた国内委員会を支援するためといったその目的について、報告がなされた。

国内委員会の会員数は、30,624名となった。

#### 議題 7 戦略的配分見直し委員会

当初の発表予定者が交通事情により来場できず、Knut Wik 委員長から報告された。

基金は国際委員会が研究分野でより活動できるように、また、毎年の積立金調整をよりよく分析できるように奨励するものであり、34の特別プロジェクト財政支援申請書が受理され、うち15のプロジェクトに1,000～6,000ユーロの基金が措置された。

2014年の特別プロジェクトに付された勧告は、幾つかのイコム委員会又は/及び地域のアプローチを含む総合的なプロジェクトを奨励すること、対象とする聴衆や出席者の資格、プロジェクトの実施方法を明記することなどを挙げており、申請締切は2014年6月であると説明された。

#### 議題 8 国際委員会の法的位置付け

Knut Wik 委員長から、「国内委員会は国際委員会とは反対に、当該国内で法的地位を持たなければならず、この点について議論の余地はない。問題は、これを規約に規定すべきかどうかである。」として、「執行委員会から示された修正案、規則・規程の変更点、結果と留意点、イコムはイコム外の委員会に基金を配分できるかどうか、を国際委員会・国内委員会で別々に審議して欲しい。」との説明があった。

出席者から、「法的地位を持つ委員会がイコム基金を得る上で有利なのか、また、国際委員会（や国内委員会）の委員長は3年に1度変わるが、これが国際委員会の地位に影響を及ぼさないか。」との質問があり、「正に確かな法的地位と銀行口座を持つことが重要である。しかし、委員会にはまだその選択の余地があるのが問題である。」との回答がなされた。

イコム会長から、「全ての国際委員会がパリでの銀行口座開設を求められており、済ませた所は満足している。」との報告があった。

#### 議題 9 国際学術誌「無形遺産」のプレゼンテーション

イコム韓国委員長 Ki-dong Bae 氏から、国際学術誌「無形遺産」について、2月に Allisandra Cummins 委員長（前イコム会長）による会合を開いたこと、昨年は30紙が集められ、評価し、最終原稿が練られたこと、ここ数年、質は向上していることなどが報告された。

#### 議題 10 イコム NATHIST（自然史博物館・コレクション国際委員会）の自然史博物館の倫理規程

Eric Dorfman 氏（イコム NATHIST 委員長、倫理委員会委員）から、執行委員会が昨年 4 月に採択した当規程について説明され、イコム倫理規程の付属書として取り扱われるべきことが報告された。

そして、収蔵品は他の文化財と同様に扱われるべきとのメッセージを伝えつつ、更に詳細な説明が行われた。

#### 議題 11 規約と内部規則・規程

##### (1) Goranka Horjan 委員長によるワーキンググループ (WG) からの報告

執行委員会委員、WG 委員長である Goranka Horjan 氏から報告が行われ、以下の結論が述べられた。

ア、方法論：使用言語の変更について意見が求められ、法律家に相談すべきことを決めた。

イ、言語の統一：文書中の文言がイコムの適切な機能を妨げているかどうかの精査が求められており、これが重要な任務である。

ウ、一般的留意点：修正はフランスの法令に適合しなければならない。

WG の結論は、現行のイコム規約はその適切な機能の障害とはなっておらず、もし、国際委員会の法的地位の変更などを決めるのであれば、イコム規約や内部規則・規程について必要な変更が行われるべきであるとした。

##### (2) イコム規約と統治。WG 委員 Stephen Cannon-Brookes による、2000 年（マイノリティー報告）後の経過報告

Stephen Cannon-Brookes 氏から報告が行われたが、Knut Wik 委員長から、報告を受理したもののまだ検討がなされていないため、8 月 17 日（土）の当会で議論したい旨提案があり、全会一致で了承された。

以上の後、諮問委員会は執行委員会に対して以下を求めることとした。

- ・規約と内部規則・規程の見直しの続行
- ・異なる意見や声も考慮されるよう透明性、包括性、民主制の原則を確保すべき WG の義務を見直す
- ・規則等見直しに諮問委員会が参加できるようにする
- ・WG に新たな委員を加える
- ・これまでの WG の作業（「マイノリティーレポート」を含む）、2010 年以前の運営ポリシー等を踏まえて構築する

【Knut Wik 委員長から、議題 16（Ann Davis による国際委員会個別会合からの勧告に関するプレゼン）、17（Kwame Sarpong による国内委員会個別会合からの勧告に関するプレゼン）、18（個別会合からの勧告の採択）については土曜日の第 78 回諮問委員会で対処することとし、議題 19 について今から審議する旨説明があった。】

### 2013-2016 イコム会長選候補者によるプレゼンテーション（議題 19）

Knut Wik 委員長が、イコム会長選挙立候補者は、Hans-Martin Hinz（現会長）、Carlos Brandao（執行委員会委員）にプレゼンテーションを促した。

### 決議の手続きの情報（議題 13）

決議委員会委員長 Amareswar Galla 氏から、決議は総会のテーマに沿うべきものであること、イコムの規則や戦略計画その他に合致すべきものであることなどが説明された。

### 上海大会決議の進捗状況：イコム・トレーニングセンター・北京（議題 12）

執行委員会委員 Laishun An 氏（中国国立博物館副館長、イコム・トレーニングセンター・北京センター長）と同委員 Claude Faubert が同センターについて報告した。博物院が同センターをホストし、研修者の渡航費等のために中国政府から年 20 万ユーロの補助金を貰っていること、第 1 回の研修コースは 11 月に開催されることが説明された。

### 2011-2013 戦略計画の評価と、2014-2016 戦略評価：手続き（議題 14）

イコムベルギー委員長 Wim de Vos 氏から、これらの評価は、イコムが各委員会を代表して活動するために大事な機会ともなるものであること、今後送られる質問票にしっかり記入して欲しいことが説明された。

---

## II. 開会式及び基調講演

8 月 12 日午前 9 時 50 分から、大会及び総会の開会式が開かれ、Carlos Brandao イコム 2013 組織委員会委員長、Marta Suplicy ブラジル文化省大臣、Mariana Varzea リオデジャネイロ州博物館会長、Hinz イコム会長等から、それぞれ歓迎の挨拶がなされた。

その後、サンパウロ大学哲学・人文学部名誉教授 Ulpiano Bezerra Meneses 氏による基調講演が行われた。

同氏は、「博物館と人間の状況：感覚的な地平」の演題の下に、

ア、記憶・・・文字による記憶が主流であるが、物自体から得られる感覚的経験も重要である。

イ、創造力と手により果たされる役割・・・「人はその手と共に考える動物である。(M. Mauss)」

ウ、非物質的社会的成長・・・好ましくない情勢を産んでいるとし、博物館は我々の人生の全段階においてそのクオリティを高めるための重要な役割を担わなければならない。

とした。

### III. 第 28 回総会

第 28 回総会が、8 月 17 日午前 9 時から午後 1 時 30 分まで、Hinz 会長が議長を務め開催された。

#### 1 議事次第案の承認

議事次第案が原案どおり承認された。

#### 2 2012 年 6 月 6 日第 27 回総会議事録承認

同議事録が原案どおり承認された。

#### 3 会長報告

Hinz 会長から、以下のような報告が行われた。

- ・ 2011-2013 イコム戦略計画策定協力者に感謝すること
- ・ 会員が 3.7%増加したこと
- ・ イコム旅費財源制度が機能していること、イコム諸委員会も財政支援を行っており、これを可能にした Getty 基金に感謝すること
- ・ 国際博物館の日の行事に 129 か国 32,000 以上の博物館が参加したこと
- ・ Icommunity のプラットフォームが立ち上がり、会員がよりよく繋がったこと
- ・ 31 の国際委員会のうち 28 が銀行口座を開設し、イコムの円滑な財務管理に役立っていること
- ・ 文化財非合法取引への戦いを主導し、「危機的なエジプト文化財の緊急レッドリスト」の刊行や文化財非合法取引国際監視機構の立上げなどを行ったこと
- ・ UNESCO との間で、科学雑誌「国際的な博物館」の出版権を引き継ぐ契約を締結したこと

#### 4 2012 年会計報告

Dominique Ferriot 収入役から 2012 年会計報告が提示され、業務の収支、12 月 31 日現在の貸借対照表について説明が行われた。

主な説明事項は、2012 年は、8,409 ユーロの黒字だったこと、イコム会員が 30,624 人となり、顕著な会費収入増となったこと、諸機関からの補助金が（2013 年は増えているが）減少したこと、ネットワーク支援プログラムへの配分額は 11%増としたことなどであった。

Viv Golding 氏（ICME 委員長）から、「イコムの財源の一定程度(5%又は 10%)を国際委員会の旅費用として分配可能とするかどうか、明確にできないか。」との質問があり、会長から「同様な要請は ICME 以外の国際委員会からもあると思われ、新執行委員会における審議課題となるのではないか。」との回答がなされた。

他に、事務総長等の海外旅費についてはどこに計上されているか、イコムニュースが電子版になり予算額はどうなったかなどの質疑応答がなされたが、2012 年の会計報告は原案どおり承認された。

## 5 決議手続き

Hinz 会長が Amareswar Galla 決議委員会委員長に、決議案を提示するよう招請した。

### 5.1 決議

#### **決議案 1：イコム大会の決議のフォローアップと中間評価**

Galla 氏から決議案 1 が読み上げられた後、次のような質疑応答が行われた。

Gina Barte イコムフィリピン委員長から、決議案採択後はどうなるのか、一旦、決議案を受け入れた国内・国際委員会について、決議委員会はフォローアップを行っているのかといった質問がなされ、Galla 氏から、「決議委員会はアドホックな委員会であり、これを永続させる権限は自分にはなく、新会長・新執行委員会の仕事になる。」「決議委員会はモニタリングの委任を受けていないが、決議案が採択されたら「戦略的計画 2013-2016」中に吸収合体されることから、フォローアップは執行委員会によりなされると言えるのではないか。」との説明がなされた。

また、Galla 氏は、決議文を広く周知せしめるため、諸国の言語への翻訳が重要であると強調した。

決議案 1 は原案どおり採択された。

#### **決議案 2：「博物館のドキュメンテーションの原則に関する声明」の採択**

Galla 氏から、決議や憲章その他の文書が採択されたら、各委員会は自身のウェブサイトこれらを掲載すべきであるとの前置きがなされ、決議案 2 が読み上げられた後、原案どおり採択された。

#### **決議案 3：イコム事務局と事務総長の採用**

Galla 氏から、この決議は幾つかの委員会から提案されたものであるとの説明があり、会長と執行委員会は、新事務総長の採用の遅延について会員に説明し、次の段階のコミュニケーションに進んで欲しいとの要請がなされた。

Stephen Cannon-Brookes (ICAMT 委員長) から、文中に「透明性ある」との文言があるが、これが過去 3 年欠けていたものであり、何についての透明性が必要なかを明確にすべきとの意見があった。

Hinz 会長から、諮問委員会、国内・国際委員会にはこれまでの経過を最初から報告するとの説明があり、決議案 3 は原案どおり採択された。

採択後、Douglas MacDonald イコム米国代表から、イコムの諸団体の責任及び役割を明確にするため、WG を設けるべきとのコメントがなされ、Hinz 会長から謝意が述べられた。

#### **決議案 4：博物館、ジェンダー主流化及び包摂：上海 2012「イコム文化の多様性憲章」に反する基標**

Virgil Stephan Nitulescu イコムルーマニア委員長から、「上海 2012「イコム文化の多様性憲章」に反する基標」について、仏語版は分かりやすいが英語版は分かりにくいとのコメントがなされ、Galla 氏から仏語版がオフィシャル版であるとの回答がなさ

れ、他に質疑はなく、決議 4 は原案どおり採択された。

#### **決議案 5：武力衝突、革命、内部闘争等の事前／最中における文化遺産の保護**

Galla 氏から、ICOMON、CIPEG 及びイコムモロッコ委員会より案文を受け、資料のような決議文案にまとまったこと、「南の諸国」という文言は「発展途上国」に修正することが説明された。

決議案 5 は原文どおり採択された。

#### **決議案 6：世界的財政危機下での博物館の生存可能性・持続可能性**

Ki-dong Bae イコム韓国委員長から、国際博物館年の創設をユネスコに対して提案する新たな一文を加えて欲しいとの要請がなされた。

これを受け、Galla 氏が「イコムの戦略的リーダーシップを進める一環として、イコムは、国連とユネスコが国際博物館年を宣言するよう提唱する。」という文章の追加について可否を諮った結果、決議案 6 は係る追加が承認され、採択された。

#### **6 倫理委員会：イコム NATHIST（自然史博物館・コレクション国際委員会）の自然史博物館倫理規程の承認**

Martin Scharer 氏から、倫理委員会による、ツールキットを含む新たなプログラムや倫理問題研修プログラムのためのWGの立ち上げ等について報告があった。

次いで、Eric Dorfman 氏から、イコム NATHIST の倫理問題WGによる 6 年間の審議の結果であること、一定事項について更に発展させる必要があることなどが説明された。

総会において、「新たなイコム NATHIST の自然史博物館倫理規程」は総会の実務文書の中で提示されたものとして承認された。

#### **7 新たな 2 人の名誉会員推薦の承認**

Hinz 会長から、執行委員会が Andre Desvallees 氏（フランス）、Zhang Wenbin 氏（中国）を推薦したことを説明し、執行委員会委員の Tereza Scheiner 氏と An Laishun 氏から、それぞれ両氏の紹介がなされ、2 人の名誉会員推薦が承認された。

#### **8 カテゴリー 4 の国の会費減額の承認**

Hanna Pennock 事務総長から、カテゴリー 4 の国の個人会員数が 8.3%減少したこと、カテゴリー 4 の国の会員数はイコム全体の会員数の 1%でしかないが、イコム全加盟国数の 27%を占めること、また、国内委員会がない国もあり、困難に直面していることなどが説明され、年額 15 ユーロの会費を 5 ユーロ減額する提案がなされ、承認された。

#### **9 第 24 回大会（ミラノ 2016）、第 29 回総会（パリ、2014 年 6 月）の期日及び場所**

Hinz 会長から、次回総会は 2014 年 6 月 2-4 日の年次会合の間に開かれること、次回大会は 2016 年 7 月 2-9 日にミラノで開催されることが報告された。

#### 10 執行委員会選挙結果及び 2013~2016 イコム会長の指名

2013~16 年の執行委員会選挙の結果が発表され、イコム会長に Hans-Martin Hinz 氏（ドイツ）が再選、副会長に Tereza Cristina Moletta Scheiner（ブラジル）、George H. Okello Abungu（ケニヤ）の両氏が再選、収入役に Anne-Catherine Robert-Hauglustaine が選ばれた。同時にその他の執行委員 11 名も選ばれた。

Hinz 新会長から、再任いただいたお礼、代表されていない会員の方々にも配慮したいことなどが述べられ、最後に、ブラジルの組織委員会に対する謝意を表し、総会が閉じられた。

---

#### IV. 閉会式

11 月 17 日午後 1 時 30 分から大会の閉会式が行われ、Carlos Brandao 氏の演説の後、イコムの旗がブラジル代表からイタリア代表に手渡され、24 回大会は、2016 年 7 月 2 日から 9 日まで開催されるとの発表がなされた。

---

#### V. 第 78 回諮問委員会

8 月 17 日午後 3 時 15 分から第 78 回諮問委員会が開催された。

はじめに Knut Wik 諮問委員会委員長から、諮問委員会副委員長候補者の推薦は、コーヒブレイクまでに行って欲しいとの案内があった。

##### 国内委員会会合の報告、議題 11.3 への他の勧告

Knut Wik 委員長から、「新しい委員長の選挙から始める。その後、前回 77 回会議の幾つかの積み残しに対処するため、個別会合からの勧告の受理や採択を行ったり、国際委員会の法的地位への勧告の議論、決定を行ったりしなければならない。」との説明があった。

Ann Davis（ICOFOM 会長、国際委員会分離会合委員長）から、①法的地位、②会員のデータベース、③国際委員会の運営、④財源、⑤活動報告、⑥その他、についてそれぞれの勧告が行われ、諮問委員会により全会一致で採択された。

Samuel Franco（イコムグアテマラ委員長）から、国内委員会分離会合の報告が行われ、2013 年執行委員会から提案された変更により規約と内部規則・規程について議論することに合意したことが説明された。

勧告は、諮問委員会により全会一致で採択された。

##### 規約と内部規則・規程（議題 11）

Stephen Cannon-Brookes 氏から、2007 年以前の規約に戻ることは要求しないが幾つかの現行規約を精査することと新たなWGを設けることが訴えられた。

Hinz 会長から、「WGの任務はその報告書が諮問委員会に提出された時点で終了する。

諮問委員会が執行委員会に対して疑問を持っているのであれば、如何にWGを継続するか考えるべきである。」との説明がなされた。Knut Wik 委員長からは、「新たなWGを作るべきであるが、執行委員会と会長が委員の意向を確認した上で立ち上げなければならない。」との発言があった。

#### 諮問委員会委員長選挙（議題4）

Carina Jaatinen 選挙管理委員長から、第1回投票結果が報告され、その後、第2回投票で上位2者が争い、Suay Aksoy（トルコ）が62票でJarense Boonstra（オランダ）23票を下して委員長に当選した。

副委員長には、ただ1人だった立候補者 Nicholas Crofts 氏（CIDOC 委員長）が全会一致で選ばれた。

#### 「2014 国際博物館の日」情報（議題5）

Hanna Pennock 事務総長から、2014 国際博物館の日のテーマは「Museum collections make connections」であること、多くの国内委員会からの推奨を聞いており、イコム会長に強力な声明を發して貰うよう要請したこと、2015年のテーマは「Museums for sustainable society」であることなどが説明された。

Hanna Pennock 事務総長から、次回の第79回諮問委員会は、パリで来年の6月2日（イコム年次会合は6月2～4日）を予定している旨の予告があり、会が閉じられた。

### 3. 役員選挙の結果（第28回総会）

イコム大会の会議の一つの焦点は、会長や副会長を含む執行委員会等の選挙にある。今大会の第28回総会における選挙では、投票の結果、以下の委員等が選出された。任期は2013年から2016年で、今後3年間のイコムの主要戦略を執行する。

#### イコム執行委員会委員（2013～2016年）

##### 会長

Prof. Dr. Hans Martin Hinz 【ドイツ】

##### 副会長（2名）

George Okello Abungu 【ケニヤ】

Tereza C. Moletta Scheiner 【ブラジル】

##### 収入役

Anne-Catherine Robert-Hauglustaine 【フランス】

##### 執行委員会委員

Ossama Abdel Meguid 【エジプト】

Laishun An 【中国】

In-kyung Chang 【韓国】

Luisa de Peña Díaz 【ドミニカ共和国】

Willem De Vos 【ベルギー】

Alberto Garlandini 【イタリア】

Goranka Horjan 【クロアチア】

Peter Keller 【オーストリア】

Merete Ipsen 【デンマーク】

Diana Pardue 【アメリカ合衆国】

Regine Schulz 【ドイツ】

Suay Aksoy 【トルコ】 ※諮問委員会委員長として

## 4. 第23回イコム大会決議

(以下は、リオデジャネイロ大会最終日の総会において提案・配布された大会決議案である。総会での議論を踏まえて若干の修正が加えられる予定である。)

### 決議1. イコム世界大会決議のフォローアップと中間評価

3年に1度開催されるイコム大会およびイコム総会の期間中になされる決議の長い伝統を考慮にいれ、イコム大会における決議の目的がイコム組織の主要な文化的方向づけと組織の方針を明確にすることにあるに鑑み、決議の手続き規則において、採択された以降の3年間における決議の実行状況を定期的に評価する枠組みが設けられていないことに留意し、総会は、執行委員会に対し、第29回総会において、第23回イコム大会の決議起草委員会にその策定が課せられたイコム決議の中間的年次評価を確定し、実行に移すことを要請する。

ブラジルのリオデジャネイロにおける第28回イコム総会の会議で、2013年8月17日に、次の勧告がなされた。執行委員会は、

- ・第28回イコム総会の決議の実行状況をフォローアップするための手続き規則を、2014年6月までに確定する。
- ・決議の実行状況の定期的評価がなされ、その詳細な報告案を、次回のイコム・ミラノ世界大会の少なくとも3か月前までに、イコム会員が入手できるようにする。
- ・全ての国内委員会は、今後、新たに採択される全ての決議を各国の使用言語に翻訳し、利用可能な複数の異なるコミュニケーション手段により、誰もが入手可能になるよう、最善を尽くすことを奨励する。

Daniele Jalla、イコム・イタリア委員会、水嶋英治、イコム日本委員会、Wim De Vos イコム・ベルギー委員会、Marie-Francoise Delval、イコム・フランス委員会および AVICOM により 2013年8月12日に提出された。

### 決議2. 博物館ドキュメンテーションの原則に関する声明文の採択

イコム規約の第4条によれば、イコム職業倫理規程を尊重することは会員たるべき必須条件であること、イコム職業倫理規程は、博物館の所蔵品が適正に文書化されること、また、この文書化業務には、専門的な基準を尊重し、確実に管理し、正当な利用者が利用できるようにすることが求められていること (§2.20 p.5)、さらに、イコム職業倫理規定は、

知識の増加と博物館と文化施設間の協力を寄与するために、文書化された情報が施設間で共有されることを勧告していること、適正な文書化は、文化財の不法な取引との戦いにおける主要な手段として、イコム、ユネスコ、インターポール、世界税関機構にとって重要な役割を果たしていること、イコムの諮問委員会は、パリの第75回会議において、適正な文書化の重要性に対する一層の普及啓発の必要性を認めていること、以上の諸点に着目し、ブラジルのリオデジャネイロにおける第28回イコム総会 2013年8月17日の会合では、以下の事項を認定することが勧告された。

- ・ 2005年ザグレブにおいて開催されたドキュメンテーション国際委員会 (CIDOC) は、博物館がその所蔵品の適正な文書化を維持するという、博物館の法的、倫理的、かつ実践的な義務について、わかりやすく明確な声明文を提供し、イコム職業倫理規定のセクション 2.20 を詳述する必要性を強調した。
- ・ ヘルシンキで開催された CIDOC の 2012 年総会では、博物館の文書化に関する基準が 2013 年 6 月 13 日水曜日に採択された。
- ・ この博物館の文書化に関する基準は、イコム職業倫理規定のセクション 2.20 と 6.1 を補うものと考えられる。

2013年6月17日 CIDOC によって提出された。

### 決議 3. イコム事務局と事務総長の採用

イコムの運営事務局は、本組織とその会員の運営母体であり、またそれが持つ、イコムの戦略計画および決議の管理機構による実行において果たす主要な役割を認識し、事務局の運営に多大な影響を与えた最近の出来事を勘案した結果、2013年12月31日までを任期とする暫定事務総長の採用と併せて、事務局の組織化を任務とするワーキング・グループが設立されたことに着目し、イコムを効果的に機能させる条件の確立を求めて、ブラジルのリオデジャネイロにおける第28回イコム総会は、2013年8月17日の会議で、新たに選出された会長と執行委員会に対して、次の勧告がなされた。

- ・ 事務局を再建する過程を継続し、それが透明性のある方法で、執行委員会から全面的に承認されている行為により実施する。
- ・ 2013年12月末までに雇用の過程を終了し、イコム事務総長を可能な限り早急に任命する。

2013年8月12日にイコム委員会の複数の議長（イコム・イタリア、イコム・ギリシャ、イコム・スイス、イコム・ノルウェイ、イコム・フランス、イコム・ドイツの各国内委員会、イコム展示交流、イコム美術の博物館・コレクション、イコムドキュメンテーションの各国際委員会、

イコム中国、イコム・ベルギー、イコム・モロッコ、イコム・カタール、イコム・チュニジアの各国内委員会)、Marie-Francoise Delval から提出された。

#### 決議 4. 博物館、ジェンダー・メインストリーミングと包括：イコムの文化の多様性憲章 (2010 年上海) を評価指標として

- ・イコムが、イコムの文化の多様性憲章を第 25 回総会 (2010 年 11 月上海) で採択したこと、
- ・また、第 25 回総会で包括的博物館知識社会に対する継続的な支援を表明したこと、
- ・包括的博物館知識社会会議の一環として、2013 年 4 月にコペンハーゲンで開催された包括とジェンダー・メインストリーミング国際シンポジウム (共同議長：パリのイコム会長) において、ジェンダーや女性の課題に博物館が十分関与していないことに対する強い懸念が表明されたこと、
- ・ジェンダー・メインストリーミングや、人種、民族、階級、信条、年齢、身体能力、経済的な地位、地域主義、性的志向性など、その他多様性から生じる文化的境界は、博物館の包括の原則の推進において重要な課題であること、
- ・世界を代表する NGO となることを目指すイコムは、会員とその地域社会、世界の国々の包括を拡大し、それを奨励しなければならないこと、

上記の諸点に着目し、ブラジルのリオデジャネイロにおける第 28 回イコム総会の 2013 年 8 月 17 日の会議で、次の勧告がなされた。

新たに選出された会長と執行委員会は、

- ・イコムの文化の多様性憲章を評価指標として、各種委員会の審議を含むイコムの事業と活動が、文化的・言語的な多様性にどれだけ取り組んでいるかを評価するための系統的なアプローチを開発し、その作業の一部として、
- ・ジェンダー・メインストリーミングに関する方策を開発し、イコムの戦略的な方向付けの不可欠な要素として、積極的にその実行が担保されるようにする。

ジェンダー・メインストリーミングに取り組むにあたり、

1. 我々は、博物館がジェンダーの観点から、語られる物語を分析することを勧告する。
2. ジェンダーに関する方針を持つために、我々は、博物館が、ジェンダーの観点から観客や職員や事業と共同で取り組み、その観念を具体化することを勧告する。
3. 我々は、博物館が、博物館における包括という観念を実現するために、諸要素間の横断的分析 (人種、民族、ジェンダー、階級、信条、性的嗜好等) を利用することを勧告する。

Merete Ipsen、イコム・デンマーク委員会、Wim de Vos、イコム・ベルギー委員会、Yasmin Khan、イコム・イギリス委員会により 2013 年 8 月 11 日に提出された。

## 決議 5. 武力衝突、革命、内戦中とその後の文化遺産保護

シリア、エジプト等諸国、アラブ圏における現在の歴史的イベントを考慮したとき、イコムは、暴力、蛮行や、遺跡や博物館における略奪によって、それらの国々独自の文化遺産資源が損失している状況に対し、強い懸念を表明する。イコムは、博物館や歴史的建造物や史跡における略奪や蛮行と、それらに伴う文物の破壊と文化財の不法な取引を非難する。イコムは、この人類の歴史と文化に対する回復不能な損失について、世界のコミュニティに警告するとともに、文化遺産と文化的アイデンティティの破壊に対する世界の博物館界の意識の向上を呼び掛ける。オーストラリアのメルボルンにおける第 19 回イコム総会（1998 年 10 月 16 日）と、韓国のソウルにおける第 21 回イコム総会（2004 年 10 月 8 日）では、すでに、1954 年に採択されたハーグ条約とその第一議定書の重要性が強調されている。

ブラジルのリオデジャネイロにおける第 28 回イコム総会の 2013 年 8 月 17 日の会議では、次の勧告がなされた。新たに選出された会長と執行委員会は、

- ・博物館、記念物、遺跡に対する破壊的な影響が緩和されるか最小限に抑える方法を探求し、博物館や史跡における有形・無形の文化財を保護するためのあらゆる措置を支援する。
- ・会員や関係するネットワークのパートナーに対し、危機に瀕している国々の文化遺産や、博物館、史跡を保護する取り組みとパートナーとの協力の強化をさらに要請する。
- ・全ての政府機関に対し、1954 年ハーグ条約、第一および第二議定書を批准するよう、働きかけを新たに進める。

- 
- ・2013 年 4 月 2 日に国連総会で採択された、通常兵器の国際貿易を規制する武器貿易条約 (Arms Trade Treaty; ATT) を歓迎するとともに、これらの条約や関連する国際規制の中に、博物館について、その関連する資料と遺産資源を保護するために、適用除外を設けるよう勧告する。

- 
- ・南方諸国への支援を考慮して、博物館や、有形、無形の文化財資源の復旧のために、主要、あるいはその他の利害関係者との協力と協調により、政策主導の方策を開発する。

「武器と軍事に係わる博物館国際委員会 (ICOMAM)」（2013 年 6 月 25 日提出）、モロッコ王国の「抵抗と解放軍国立博物館 (the National Museum of the Resistance and Liberation

Army)」（2013年7月26日）、イコム・エジプト学国際委員会（CIPEG）（2013年8月3日）の3つの関連する勧告から起草された。

## 決議6. 地球規模の金融危機下の博物館の生き残りと持続可能性

地球規模の金融危機とそれによる文化セクター全体、とりわけ博物館への負の影響を認識するとともに、博物館が知の創出と社会学習のための独自の市民の場であることを認め、持続可能な開発においては、博物館が、経済、社会、環境とともに4つの柱の一つとして、文化のなかで重要性をもつ場であることを強調し、世界各地で、博物館の閉館を含むその維持発展のための資源の縮小を懸念し、2012年6月のRio+20サミット報告書「我々が望む未来（The Future We Want）」や、これに続く、2013年の国連やユネスコの審議、とくにジュネーブにおける国連経済社会理事会の審議の場では、文化も博物館も適切に認識されていないことを憂慮しつつも、杭州ユネスコ宣言「Placing Culture at the Heart of Sustainable Development Policies（持続可能な開発政策の中核に文化を位置付けて）」（2013年4月17日）を支持し、ブラジルのリオデジャネイロにおける第28回イコム総会の2013年8月17日の会議では、次の勧告がなされた。即ち、執行委員会は、2015年以降の開発指針（Development Agenda）に博物館が位置付けられるよう、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）の起草において戦略的リーダーシップをとり、2014年末までに、政策的枠組みにより、開発のための社会的、経済的、文化的、環境の進展指標における博物館の価値を増大させる。

- ・イコムの全ての委員会、地域連盟、その他の機関やパートナーの協力のもと、経済危機下におけるコレクションの保全を含め、博物館の持続可能な発展に向けて、強力かつ効果的なキャンペーンを実施する。
- ・イコム・ヨーロッパから提出された、リスボン宣言（2013年4月6日）、国連、ユネスコの声明等、イコムのウェブページで利用可能となる、国際舞台における文化の持続可能な発展に関する近年の関連文書に基づいて起草された（2013年8月11日）。

（翻訳協力：五十嵐耕一、原嶋千榛）



## 第Ⅱ部 第23回大会に参加して



## ICOM リオデジャネイロ大会に参加して 一大会運営に関する所感

根津美術館学芸第一課長 白原由起子

2013年8月、第23回のICOM大会が、地球の反対側の都市リオデジャネイロで開催された。1986年に第14回を開催したブエノスアイレスに続いて、南米での開催は2国目となる。世界103カ国から約2,000人が参加したリオ大会は、心地よい風が吹き抜ける好天の下開催された。

大会の会場となった市民芸術センター (Cidade das Artes) は、リオデジャネイロ市南部の新興開発地区にある、コンクリート仕上げの巨大な現代建築である。フランス人設計者が設計したこの多目的文化施設は、当初2004年に竣工する予算であったが、実際にはこの予算の6倍に相当する約250億円を投入して、2013年1月に柿落としを行った。多人数を収容する大ホールと30以上の各種委員会を行う部屋を擁する会場を考えるなら、この建物が選択された理由も首肯される。とはいえ、本大会の開催時に、施設周囲の道路も標識も整備されていなかった。幹線道路に囲まれたこの建物から、隣接するショッピングセンターに徒歩で行くことがもっとも難しかった、というのは信じていい、しかし本当の話である。そして市内への交通手段は車を使うしかないため、渋滞に巻き込まれることは必至である。メイン会場の施設の使い勝手やその立地は、参加者にとって大会を印象づけるものであるし、彼らの活動範囲を左右する重要な要素であることを実感した。

大会のテーマは「Museums (Memory + Creativity) = Social Change」。会期中、ICOMの幹部が今後の指針や提言の作成を進めた一方で、大半の参加者にとっての関心事は、具体的なテーマを掲げるそれぞれの国際委員会で行われる発表、意見交換、そして見学による見聞である。今回も、委員会のディスカッションタイムで活発な質疑応答を聴き、ランチやコーヒープレイクでは積極的な意見交換や自己紹介が行われた。まさにICOM大会はこの場を提供することにあるといえる。各委員会の部屋の外には、委員会のプログラムや、活動を告知・勧誘するパンフレットが置かれ、ここで委員会主催の見学ツアーに申し込むことができる。市内観光のガイドブックや博物館のノベルティ、次回のミラノ大会のPRツールまでもみられた。委員会の運営でいえば、これまでも複数の国際委員会が合同で委員会を開催ことはあったが、今大会では、ICOM 韓国支部 (ICOM Korea) が複数の委員会と共催して、大ホールを使った国際委員会を行ったことである。ICOM への韓国の積極的な姿勢が窺われる。なお、有料でブースを出展するエリアは、今回、会場フロアの下階 (グランドレベル) に設けられた。前回の上海大会が展示什器を扱う企業や各地の博物館が数多く出展し、活況を見せたのとは比べ、なんとも寂しい出展数であった。しかし、アジアから中国や台湾のブースが設置されたこのエリアに、日本から日本博物館協会がブースを出展したことは、日本のプレゼンスを宣伝する良い機会になった。立ち寄る人々にパンフレットを説明し、抹茶をふるまう、という丁寧な対応ができたことを記しておきたい。

参加者の視線で大会を見渡すと、手際の良さよりも、どうしても不手際であったことに目が行ってしまう。そのいくつかを挙げると、1,780席の大ホールで行われた開会式は、開場時間になってもホールの扉が開かなかった。アナウンスもないままに待たされ、結局、式は予定より50分遅れて式は始まったのである。配布された公式プログラムガイド（Conference General Guide）は洒落たデザインの冊子ではあるが、肝心のプログラム番組表としては見づらいもので、しかも必要な情報が乏しい。また委員会の部屋のいくつかは、小さすぎて（同時通訳ブースの設置で部屋の収容人数はさらに少なくなる）、聴講を諦めなければならないことがあった。さらに問題は、部屋の位置や変更を示す集中案内板のようなものがないため、部屋の扉に貼られた告知を見た参加者が、変更先の部屋番号を探し歩く光景がしばしばみうけられた。プログラムがスケジュール通りに進行した委員会もあったはずだが、ただ筆者が参加した委員会の1日ツアー（市民芸術センター—博物館見学—岬での昼食—大学での発表会—ホテル）では、発表会の開始が大幅に遅れ、さらに終了後に大学に迎えにくるはずのチャーターバスもなかなか到着せず、空腹と疲労をかかえホテルに戻るようになった。時間に対する意識の違いを痛感した次第である。

その一方で、功を奏したと思われる点や、主催者側の優しい気遣いについても記しておきたい。レセプションデスクには多くのスタッフが準備を整え、参加登録の確認、手続きや同時通訳イヤホンの貸出しがきわめてスムーズであった。彼らの服はすべて黒色の服装に統一された。昼食は、会場ロビーのスペースで料理や飲み物が無料で提供され、また昼前と午後のコーヒーブレイクの時間に、ロビーや廊下で美味しいエスプレッソで一息つくことができたことも嬉しい。センター内の建物同士をつなぐ開放的なスカイウォークには、鮮やかな色のソファや生花が置かれ、無機質なコンクリートの建物に彩りを添えていた（しかし、風雨の天候になったらどうなっていたらろう）。

総じていえば、主催者が、イベントの何にこだわり、どこにもてなしの気持ちを表そうとしたか、それは“お国柄”というような意識をも含め、興味深いところである。また、先の上海大会が、圧倒的な国力を海外に誇示する政治的なイベントであったのに対して、リオ大会には、政治色がまったくといっていいほど感じられなかった。むしろこの国の急激な発展とそれによって生じた歪みや厳然たる格差の問題が、博物館というフィールドに反映されている現況を、包み隠さず提示したという印象がある。市内の博物館や美術館を見学して感じたことは、熱帯気候という難しい環境下での、歴史的建造物を使った博物館が抱える深刻な問題であり、この状況と対照的に、斬新な建築物の現代美術館が建設されていること、そしていずれも施設や文化財の維持管理体制が課題であるように思われた。

ICOM大会に参加することは、博物館という窓を通して見えてくるその国の文化に対する意識や実践、いわば文化力の現在を体験することなのかもしれない。参加者はその国の文化力を安易に批判してはならない。その批判的視点は、自国が抱える問題に向けられるべきであり、それこそが本大会に参加することの意味であったと思う。

## ICOM リオ大会 2013 大会決議をどう読むか

筑波大学図書館情報メディア系教授 水嶋 英治

はじめに

ICOM リオ大会は今年8月に開催されたが、大会決議起草委員会が設置されたのは半年前の2月であった。ICOM ヒンツ会長から私のところに起草委員を引き受けて欲しいとのメールが届いた。3年前の上海大会では五十嵐耕一・元日博協専務理事がその任を負っていたため、アジア地域圏から誰も出ていないのもまずかろうと思ひ引き受けることにした。ここでは我が国が押えておかなければならない要点について簡単に述べておきたい。

### 決議1. 大会決議のフォローアップと中間評価

「第28回イコム総会の決議の実行状況をフォローアップするための手続き規則を2014年6月までに確定する」とのことなので、今後我が国も「決議の実行状況の定期的評価」をすることが求められる。また新たに採択される全決議を日本語に翻訳し、『博物館研究』や協会のウェブ等で告知していく努力が必要である。詳細な報告案は、次回のミラノ世界大会の少なくとも3か月前（2016年4月）までにはイコム会員が入手できるようにする。ということは、日本においても態勢整備が急務である。

### 決議2. 博物館ドキュメンテーションの原則に関する声明文の採択

CIDOCの2012年ヘルシンキ総会で提案された「博物館の文書化に関する基準」が2013年6月に採択されている。The Statement on Linked Data Identifiers for museum objectsは博物館情報のデジタル化推進の将来にとって極めて重要な基準である。我が国においても博物館・図書館・文書館の専門家が集まり、研究会を立ち上げるなど対策を急ぐべきであろう。この決議で謳われたICOM倫理規定のセクション2.20とは「収蔵品の文書化」であり、6.1は「収蔵品の原産地」の「協力」のことである。

### 決議3. イコム事務局と事務総長の採用

前事務局長の異動に伴いしばらくの間事務局長ポストは空席であった。「事務局の組織化」と「再建」はICOM存続の生命線であるが、我が国にとっても「事務局の組織化」と「再建」は対岸の火事とばかり見ていることはできない。

### 決議4. 博物館、ジェンダー・メインストリーミングと包括

この決議は上海大会決議2（文化の多様性憲章）の補遺的な位置づけである。「ICOMの文化の多様性憲章の評価指標」となるのは、多様性、民主的な参加、協力と協調、平和とコミュニティ形成、革新と激励、能力開発、生産的な多様化、基準設定、持続可能性と環

境変化、デジタル化領域などである。

#### 決議5. 武力衝突、革命、内戦中とその後の文化遺産保護

この決議は、博物館等の「破壊的な影響」について謳われているが、我が国の文脈に即して言えば、東日本大震災や福島原発のことも当然含まれるであろう。

#### 決議6. 地球規模の金融危機下の博物館の生き残りと持続可能性

ここに謳われた「2014年未までに、政策的枠組みにより、開発のための社会的、経済的、文化的、環境の進展指標における博物館の価値を増大させる」取り組みは、ICOM日本委員会だけでできることではなく、国の関与無くして達成できるものではない。国際社会の潮流に歩調を合わせ、我が国も積極的に国際的発言をしていくことが望まれる。

#### 結語

日本国内だけで仕事をしていれば、上記の決議案は自館の業務に直接的な影響を及ぼさないため意識がこちらには働かないかも知れない。しかし例えば、決議2の「博物館の文書化に関する基準」や「文化財の不法取引」などは遅かれ早かれ必ず日本の博物館業務に関係してくることは間違いない。

大会決議は国際動向を把握できる唯一の教科書である。この教科書を、ICOM上海大会等の過去の決議文と合わせて真剣に研究しておくことこそ、我が国の博物館界にとっては国際化への第一歩であろう。

## 地方博物館国際委員会（ICR）における発表と同委員会に関する所見

吹田市立博物館学芸員 五月女賢司

本報告では、前半に地方博物館国際委員会（ICR）における筆者の発表内容について報告の後、後半では当委員会に関する筆者の所見を述べる。

まず、地方博物館国際委員会（ICR）における筆者の発表内容について報告する。

タイトルは、「Participation of the Local Community to Special Exhibition Planning in Suita City Museum, Osaka, Japan（吹田市立博物館における地元住民の特別展企画への参加）」であり、リオ大会期間中の8月14日に発表した。

大阪府にある吹田市立博物館では、展覧会企画の際、公募によって集まった市民が実行委員会を組織するなど、市民が自らの歴史・文化を表象する本格的な市民参画型展覧会づくりが2006年から始まった。これは、吹田市立博物館の前館長・小山修三の、市民に開かれた本格的な参画型博物館を目指す姿勢も相まって開始されたものである。2010年には市民参画が博物館の使命の一つとして中長期計画の中で明文化され、吹田市立博物館の運営は、名実ともに市民の本格的な関わりの現実を抜きに語るができなくなった。本発表では、市民参画型展覧会づくりという展示にまつわる議論を、展示技術論の観点からではなく、一地方博物館が置かれた市民参画の状況を一つの‘現象’として捉え、この逃れられない市民参画による展覧会づくりのあるべき姿を検討するという観点から深めた。

昨今の社会情勢や吹田市立博物館を取り巻く情勢の下、小山前館長が就任し、市民からの強い後押しも相まって市民参画型の展覧会づくりという‘現象’が立ち現われることになる。小山前館長が吹田市立博物館の館長に就任したのは、2004年6月のことである（2012年5月末に退任）。それは、前市長からの「博物館に人が入らないからどうかしてくれ」という、博物館が置かれた現代的な課題を解決するための、極めて政治的・行政的、かつ社会的な要請に基づくものであった。

就任直後から小山前館長は、「博物館は、展示資料や知識をこじんまりとまとめる場であり、展示資料を意味もなくガラスケースに入れる場である。また、それ故に来館者にとっては、つまらない場であり、博物館はこのままでは滅びる」という危機感を持って陣頭指揮にあたった。こうした危機感を背景に、博物館資料をさわって楽しむことができる「さわる展示」を開催したり、「公募市民による」（という建前ではあるが、実際には、型破りな前館長のことを「カンチョー」と慕う市民を中心とした）実行委員会形式の展覧会を開催したりした。市民実行委員会形式の展覧会としては、まず、2006年の「千里ニュータウン展」を皮切りに、翌年には「'07 EXPO '70 ーわたしと万博ー」展が開催された。また、毎年夏には自然科学に関心が高い市民を中心に実行委員会を組織し、子ども向けの自然科学系の展覧会を開催している。当然のことながら、学芸員が自ら企画する展覧会も開催してはいるが、2006年以降、毎年最低一回は近現代史や自然史分野の展覧会を開催し、

展示の企画・運営時は館内も市民実行委員や来館者の活気に満ちあふれる。

こうした運営が実を結び、市民参画型展覧会作りが導入される以前は年間入館者数が1万人台だった博物館が、2006年の「千里ニュータウン展」の時は（辺鄙な立地の地方博物館としては異例の）会期38日間で入館者数2万2千人を記録した。

このほかの成果としては以下のようなことが挙げられる。

これまでの活動の蓄積・成果を発表することを願う市民にとっては、展覧会予算を博物館から貰うことができ、自ら展覧会を企画できる一方、博物館側は内容についてあまり要求をしないのであるから、好都合だと言える。次に、市民参画型で展覧会を実施することで、市民の実態や要望に即した内容となる部分もあるのは事実である。また、市民や民間組織のネットワークを活用することで、資料収集に幅ができる。実際に、市民参画の企画を通して知り得た情報に基づき、資料を発見・収集した例は多い。さらに、学芸員一人では到底叶わないイベントの数をこなすことも出来る。当館の博物館協議会委員から、吹田市立博物館はイベントで来館者数を伸ばしている側面が強いので、展示に力をいれるべきだとする意見が出されるほど、市民参画時はイベントを多く実施する。その他、実行委員としての経験で得た知見・技術などが、博物館を巣立った市民によって、市内各所で展開されている例も散見される。

しかし、課題も見える。市民からのアイデアが枯渇しつつある一方、頭でっかちになり、時に、自己意識の高さゆえ学芸員を含む他者を尊重する意識が遠のいているように見えることがある。コミュニケーションと信頼関係をより深めること、また、互いの立場と博物館活動の進め方の方向性についての相互認識を早い段階で深めておくことが必要であろう。また、多様な当事者の主体性が実現された時、展示内容の客観性・信頼性の確保や親しみやすい展示の実現が難しい側面があるなどといった課題も残る。市民参画型展示の場合、市民の実体や要望に即した内容になることが認められる半面、マニアックな市民による一部のマニア向け展示もしくは自己満足の展示のような内容になってしまったり、反対に、大衆迎合的な展示で、調査研究の深みが感じられない展示になってしまったりする等の危険性もあるのである。

とはいえ、これらの動きは、歴史・文化の展示の権利を当事者の側である市民が獲得したという意味において重要であり、市民一人一人が「自分にとっての面白い」を形にするための支援を学芸員がすることで、市民なりの深みを感じることができる展示を実現できるのではないだろうか。

ここまでの、筆者による発表の内容である。

次に、当委員会に関する筆者の所見を述べる。

実は、筆者はICRの会合へは、初参加だった。よって、ここで意識したことは、発表の中身もさることながら、どれだけ多くの会員に印象を残すかということであった。市民参画によって展覧会をつくるための方法論や意義・課題・展望などを包み隠さず具体的に話すことで、多くの人の興味を引くよう努めた。また発表では、市民参画によって収集した

50年前の簡易型ユニットバスの紹介をしたが、風呂に入るとい世界との共通性と、コンパクトなつくりという日本製品の独自性から、関心を持つ人が多かった。結果、ICRでの筆者のニックネームが「バス・マン」になるくらいのインパクトを与えることができ、発表原稿の送付依頼が相次いだ。

ところで、ICR参加者から聞いた話も紹介しておく。ある中国人参加者によると、「中国には31の省・直轄市・自治区があるが、その中で50以上の地方博物館がICRに団体会員として加入している」とのことである。そうした背景から、英語が全く話せない中国の有力者（省立博物館館長でICOM中国委員会の幹部）をICRの理事に選出させているという（参考：日本のICOM会員は団体で28、個人で147、ICR会員は団体0、個人5、今回のICRへの参加は会員からは筆者のみ）。このことについてヨーロッパ出身のある理事は、「年次会合や理事会の時は、いつも通訳が同行している」と語っていた。今回も省立博物館の館員の女性が最後まで付き添っていた。中国は中央政府が影響力を行使し、全国の博物館に予算配分をしたり、新しい地方博物館建設を積極的に行ったりしており、日本とは博物館を取り巻く状況が違う。筆者は今回の参加・発表で、多くのICR会員と仲間意識を作ることができたので、今後に向けた第一歩としては成功だったといえる。2014年のICR年次会合は台湾で開催される（10/20～25）。日本には、地方自治体が設置する博物館を含め、地方博物館が非常に多い。台湾は地理的に近いので、日本からも地方博物館の関係者が参加し苦労話を共有するなど、ICRに馴染むことができれば、結果として日本のプレゼンスを高めることができるのではないだろうか。

このことに対する筆者の基本的な考え方は、ICOM会員数が少なくその知名度も低い日本の博物館界は、財政基盤が盤石ではなく対外的な政治力も高くないため、多数の会員や大型予算に頼るような「数の論理」ではなく、少数の会員一人一人が個性を存分に発揮し、世界のICOM会員（特に役員）の中から多くの友人を作り信頼関係を構築することで、日本への大会招致を実現させることができるのではないかと、いうものである。今後、会員一人一人が積極的にICOM活動に関わっていくことを期待する。

## 大学付属の博物館とコレクション国際委員会 (UMAC) のセッションに参加して

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館学芸員 福野明子

はじめに

この度、初めて ICOM 大会に参加し、大学付属の博物館とコレクション国際委員会 (以下 UMAC) にて事例発表させていただいた。UMAC のプログラムは、3 日間 (8 月 12~14 日) で 7 つの発表セッションと施設見学 (8 月 15 日) で構成され、各セッションにおいては毎回 20~30 人の参加者があった。発表数を国別に見ると、ヨーロッパ 7 (ドイツ 2・オランダ 1・イタリア 1・ベルギー 1・アイルランド 1・アルメニア 1)、ラテンアメリカ 6 (メキシコ 2・アルゼンチン 1・ブラジル 2・コロンビア 1)、アジア・オセアニア 6 (オーストラリア 2・フィリピン 2・ニュージーランド 1・日本 1)、アメリカ 2 であり、様々な観点から発表が行われた。(なお、UMAC セッションは、エジプト学国際委員会 (以下 CIPEG) との合同開催であった。)

今回 UMAC が掲げたテーマは、ICOM リオ大会の全体テーマである Museums (memory + creativity) = social change 「博物館 (記憶+創造) =社会的変化」を受けて、Evaluating Change 「変化を評価する」であった。過去 5~10 年に、大学博物館内外におこった変化に対して、専門家としての対応と評価について考えるものであった。単に「対応する」ことだけでは大学博物館の生き残りは保証されない状況下で、現場で何をしてきたか、また果たしてそれは効果的であったのかが問いかげられた。各セッションのテーマ、発表タイトルと発表者は以下の通りである。

### ●セッション 1: 変化する価値観・変化を評価する

「大学博物館の変化の評価および今後の展開」ルイザ・フェルナンダ・リコ・マンサール (メキシコ)

「ファジー論理を用いた大学博物館の評価」グラシエラ・ワイシンガー (アルゼンチン)  
「結局、何も変わらない」S. C. ショルテン (オランダ)

### ●セッション 2: デジタル技術とこれからのコレクション

「デジタル化、3D 印刷そして博物館空間のこれから」C. G. ネルソン (オーストラリア)  
「デジタルに生まれて: 新しいアートの形態を収集する挑戦」L. タイラー (ニュージーランド)

「イタリアの大学博物館におけるバーチャリティ」エレナ・コラディーニ (イタリア)

### ●セッション 3: 博物館の研究とコミュニケーション

「全てのための博物館学研究セミナー」ルイザ・フェルナンダ・リコ・マンサール (メキシコ)

「一般大衆に語る: ペルガモン博物館における異文化間展示プロジェクト」ガブリエレ・

ピーケ (ドイツ) 〈CIEPEG〉

「大学博物館における研究は変化をもたらすか」 ヴァニア・カルバーリョ (ブラジル)

●セッション4：政治と社会の変化に応える

「日本の博物館法施行規則改正に対応する：ある小規模大学博物館からの報告」 福野明子 (日本)

「大学博物館と当局：政府が認可する博物館に関する考察」 ナタリー・ニスト (ベルギー)

「変化するコミュニティー、変化する関係：挑戦とチャンスに応える博物館」 ニコラ・ラドキン (アメリカ)

●セッション5：新しい政策と実践

「サント・トマス大学博物館—フィリピンにおける文化遺産研究と保存の先駆」 イシドロ・アバノ (フィリピン)

「ペルナンブコ連邦大学科学技術博物館：(無) 変化を評価する」 エマヌエラ・ソウザ・リベイロ (ブラジル)

「トリマ大学のミュージアムセンター：社会的変化と貢献の可能性」 アナ・マリア・ベルナル・コルテス (コロンビア)

「21世紀の大学博物館のグローバルなモデルに変化はおきているか？カリキュラムとのつながりの再評価と学術コレクションコンソーシアムの創設」 キャサリン・ギルトラップ (アイルランド)

●セッション6：コレクションと展示の政治性について

「大学博物館の空間、ソフトパワー、異文化間コミュニケーション」 ジーナ・ハモンド (オーストラリア)

「ドイツ、ヒルデスハイムのレーマー・ペリツェウス博物館における3つの新しい展示手法について」 レジーヌ・シュルツ (ドイツ) 〈CIEPEG〉

「アルメニアにおける二つの大学博物館に関する報告」 マリーン・ミルチャン (アルメニア)

「ふたつのコレクションを語る」 ルイーズ・アン・マルセリーノ (フィリピン)

●セッション7：パネルディスカッション「博物館学モデル2.0」 クリスチャン・アンダーソン、フェードラ・リビングストン、バーバラ・ロザーメル、ブライアン・ウォラス (アメリカ)

セッション4における筆者の発表であるが、「変化を評価する」がテーマであったため、日本の博物館法施行規則改正を「変化」と捉え、ひとつの事例として、日本の小規模な私立大学博物館が学芸員を養成する教育機関として、どのように対応しているかという報告をした。まず、日本の博物館事情に関しては、明治維新以降の日本の博物館の歴史を簡単に振り返り、日本には5,747館の博物館があることや、日本では300の大学(短大を含む)で学芸員課程が開講されており、年間約10,000人の資格取得者が誕生していることなどを

紹介。そして、改正によって増えた単位数や科目などを、国際基督教大学を例に説明し、専任の教員よりも、学芸員のネットワークを用いた非常勤講師陣による開講科目が学生たちにとって学芸員の現場や現状を学ぶ上で非常に有効であるのではないかと報告した。会場からの反応として、日本の博物館数の多さと専任の学芸員数の少なさ、と同時に日本の学部レベルでの学芸員養成制度や年間に輩出する資格取得者数に驚いたという声が聞かれた。また今回初めて、UMAC では、INFORM-ALL という、コレクションや展示を通して所属する博物館を紹介するセッションが設けられたが、筆者も国際基督教大学博物館について紹介した。

すべてのセッションの最後に、UMAC の総会が開かれ、ボードメンバーの選挙、ワーキンググループ（ウェブ、ニュースレターなど）の取組みなどが紹介された。また、2014 年度会議予定地はアレキサンドリアで CECA との共同開催であるとの発表があり、セント・トマス大学博物館のイシドロ氏の提案により、2015 年度はフィリピンが会議開催予定地となることが承認された。そして最後に「大学コレクション保護に関する決議」がミネソタ大学のワイズマン美術館館長リンデル・キング氏から発議され、採択された。

#### 最後に

各セッションにテーマはあったものの、大学博物館としての規模、歴史、専門分野などの違いがあるため、発表に共通性を求めるのは難しかったが、内容は非常にバラエティーに富むものであった。大学博物館に従事するという共通項をもった参加者たちには、国を超えて共有できる問題意識があったと思う。特に、コレクションの共有、大学博物館としての新たな試み、学内での位置づけや学芸員養成を含む、教育の場としての活用の重要性が多く述べられた。

2012 年度の年次総会はシンガポールで開催され、総会に 10 年間参加し続けているイシドロ氏をはじめ、フィリピンやタイなどアジア圏からの参加は活発であった。2015 年度の総会はフィリピンで開催される予定だが、イシドロ氏は是非日本からも参加者・発表者を増やし協力してほしいと依頼された。また、UMAC メンバーと交換プログラムの可能性を話す機会もあったが、特に大学独自の留学プログラムなども充実しているため、今後は学芸員養成課程でも何らかの形で交換制度などを考えられるのではないかと思われる。今後は、是非 UMAC において、より多くの日本の大学博物館にも参加していただければと思う。

## リオ大会の公式ツアー (Historic Rio) について

国立歴史民俗博物館教授 小島道裕

今回の大会では、8月16日(金)がExcursion Dayとされ、以下のコースが用意された。

- ・ Petropolis リオ近郊にある、ポルトガル王朝時代の宮殿
- ・ Historic Rio 旧市街の史跡
- ・ Casa do Pontal Museum and Burl Marx's Estate リオ近郊にある、ブラジル大衆芸術の博物館と庭園
- ・ Corcovado and Sugar Loaf 著名な観光スポットであるキリスト像のある山と海辺の岩山
- ・ Guanabara Bay 帆船による？沿岸観光
- ・ Jeep Tour ジープによる森林観光

というメニューで、参加はあらかじめ所定の金額を払って申し込む。博物館見学の出来るコースが非常に少なく、日本人関係者の多くは、現地でチャーターした車で博物館見学を行う結果となったが、筆者は事前に Historic Rio のコースに申し込んでいたため、予定通りこれに参加した。(実際の参加者は十数名程度)

早朝からバスで各指定ホテルを回って参加者をピックアップし、現地ではガイドが市内旧市街の史跡(教会、交易場跡、宮殿跡、など)を徒歩で案内し(公称3km)、現地の解散地点(市役所前)で再びバスに乗ってホテルへ戻る、というもの。

ガイドは二人が付き、公式ガイドの名札を下げているのでその職業の人かと思ったら、一人は史跡博物館(旧大統領官邸)の職員で英語が話せ、年配のもう一人は歴史と博物館学?の大学教員、とのことで、つまり博物館関係者が自ら案内してくれたのだが、運営は非常に問題が多く、参考のために列挙しておきたい。

- ・ 全体のメニュー設定が悪く、博物館見学の機会がほとんどない。
- ・ 集合時間や詳細な行き先についての情報が公示されず、自分で確認しに行つて初めて分かる。このため、バスでのピックアップは非常に混乱し、おそらく乗れなかった人多数。事前申し込み制なのだからメールなどで個別に連絡することもできたはずだし、会場やホテルに張り出すことも簡単にできたはずだが、そうした配慮は一切無かった。
- ・ 具体的な行き先は最後まで不明で、地図やパンフレットなどの資料も一切なかった。現地での口頭の説明だけ。
- ・ どこに行くか分からず、「旗」などの目印も何もないので、途中で何名かが迷子になり、捜索に時間を費やし、結局行方不明のまま。
- ・ 正午頃現地で解散となったが、そこからバスでホテルに帰ってもすることがないので、筆者も含む多くの参加者は、帰りのバスには乗らずに、自力で旧市街見学を続けた(筆者は徒歩で国立歴史博物館に行き見学)。

以上、ガイドしてくれた関係者には感謝するが、運営はあまりに拙劣で、日本で行う場合の反面教師として学ぶべきところが多いと思われた。

## 第 23 回 ICOM リオデジャネイロ大会に参加して まぼろしの特定地域のセッションーラテンアメリカ

京都外国語大学教授・国際文化資料館館長 南 博史

このレポートの目的は、ICOM 大会で多数開かれた会議、発表、セッションの中で、国際委員会以外のセッション、とくに特定地域のセッションーラテンアメリカについてその様子を報告することにある。事前にいただいた日本語プログラムでは 8 月 13 日が「特定地域のセッションーアフリカ地域」、14 日が「ラテンアメリカ地域」ということになっていた。

そもそも ICOM 大会に初めて参加する目的は、京都外国語大学国際文化資料館（以降、資料館）の活動を国際化していくため、まずは大会に参加（国際委員会は UMAC に入会）し、世界の博物館に関するできるだけ多くの情報を手に入れることにあった（正直に言えば、雰囲気をつかむには手っ取り早いということ）。さらに、ブラジルでの開催ということで資料館が進めているラテンアメリカでの考古学研究、博物館研究の展開に具体的なアイデアが得られないか、交流のきっかけができないかということであった。もちろん、初めて参加であり、一人ではなんとも心もとないところがあったが、今回、たまたまリオに短期滞在していて、通訳をかってでてくれた本学大学院生の上田和貴君が大いに力を発揮してくれた。彼は、本学で博物館学芸員資格を取得し、またブラジルで人類学の研究を目指しており博物館活動にも興味も持っていた。

資料館では中米コスタリカにある二つの博物館と友好交流の提携を進めている。その中身の一つは、学芸員資格課程の履修生を現地で実習させるというプランである。語学を広く学ぶ本学学生が、世界と交流できる学芸員を目指して勉強できる本学ならではの教育環境を整えることになる。「語学と通して世界の平和を」目指す本学の建学精神にふさわしい活動として、学内における資料館の位置づけの向上も目指している。

さて、実際に参加した大会の課題や成果については、ICOM 日本委員会から大会へ正式に参加した先生方や、何度も大会に参加されている方々からの報告にあるので、あくまで個人的に参加した筆者や上田君の印象にとどめる。概して会場運営に関わるさまざまな課題は、ブラジルということ差し引いて考えた方がいいだろう。ラテンアメリカに関わる場合はある意味あたりまえであるが、まず予定通りには進まない。ゆえに事前の学習と情報収集、現場での対応力が必要ということだろうか。一方、ラテンアメリカからの参加者たちはかなり楽しそうに交流していた。発表の場というよりはコミュニケーション、各国の研究者同士がつながる場所になっていると感じた。つまりは日頃の交流が重要ということで、あらためて足元を見直す必要を感じたところである。

そして、肝心のセッションであるが、どうやら参加していたつもののセッションは別のセッション（ICR）であったことに大会終了後、この報告書へ執筆を依頼され、あらためて確認して気が付いたような次第である。お恥ずかしい話であるが、そもそも大会参加時

に配布されたプログラムにこのセッションの記述がなく、上田君も語学力を生かし係員に確認しても「特定地域のセッション、ラテンアメリカのセッション」だけでは「わからない」とか、ラテンアメリカ特有の「あっち」「そっち」で結局会場内をうろろうろしていたのである。そして、ようやく教えられ駆けつけた会場は確かにラテンアメリカをテーマにしたセッションということで、いくつかの発表を聞くことになった次第である（実は違ったのだが）。

語学力の問題もあって発表の内容について詳細を記述できないが、先住民文化をとりあげた発表が印象に残っている。とくに上田君は、ブラジルのペルナンブーコ大学大学院人類学学科 Prof. Dr. Renanto Athias 教授の講演が自分のテーマと重なる点があり、非常に興味深かったようだ（ハンドアウトも映像もなかったが）。内容は、ブラジル北東部の先住民の文化を残していくために、北東部の先住民の博物館を作るプロジェクトの紹介だった。現在、資料館で協力しているニカラグアでの先住民文化の正しい理解をすすめるコミュニティー博物館づくりプロジェクトにも通じるところがあり、2014年からブラジル・サンパウロ大学に留学する上田君を通して今後の交流をはかりたいと考えている。

ということで、大会終了後に ICOM 日本委員会事務局から依頼のあったこの原稿の目的は、みごとにはずれたのである。したがって、この原稿は日の目を見ない可能性が高いのであるが、ぜひこの機会に「特定地域のセッションーラテンアメリカ」なるものが、どのように開催され内容であったのかご存知の方がおられたらぜひご教示いただきたいということもあって一文をあげさせていただいた。

今回の大会が初めての ICOM 大会参加ということで、個人的には当初かかげた目的は一定達成できたと思っている。一方、多くの方々から日本の ICOM の関わり方に関する問題について伺った。また、あらためて第 22 回中国上海大会の報告書を読ませていただいた。ICOM 大会を日本へ招聘しようという話もあり、それに向けての計画なども聞かせていただいた。

課題は、博物館の一人一人の学芸員のあり方から国の政策まで、実に広く多様で深いということをあらためて確認できた。しかし、それは決してこと ICOM との関わりに限ったことではあるまい。ICOM に関わる機会を、広く日本の博物館の問題を顕在化させ、解決し課題達成への機会と捉えたい。22 年間京都文化博物館で学芸員として勤務してきた実感でもある。とはいえ課題を見つけ問題を解決していくために何ができるかとなるとまだまだ五里霧中である。とりあえず、今資料館で試みていることにこうした視点を加えてみたい。

具体的には、現在進めている海外のとくに大学博物館との交流を進めることであるが、さらに考えてみたいのが、資料館も加わっている「京都・大学ミュージアム連携」による活動である。この連携は京都市内の 13 大学 14 施設（平成 22-25 年度幹事館：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）が協働しており、合同展覧会やスタンプラリーなどを実施している。こうした活動を積極的に ICOM で紹介し、日本の大学博物館について知ってもらおうと

同時に、協働して交流の機会を増やしていくことができないだろうか。こうした交流活動を通して一つの博物館、一人一人の学芸員が世界の博物館に接し、どう関わっていくべきかを考える機会になればと思う。筆者も全く怪しいのであるが日本人にとって最大の壁の語学も、全員が同じように語学ができなければならないわけではない。それを前提に準備、分担など日本人得意のチーム力でカバーできている。

## JAPAN ブースの設置について

日本博物館協会専務理事 半田昌之

2013年のICOM世界大会において、日本博物館協会（日博協）は、協会初の試みとして、大会開催会場で開かれるワールド・ミュージアム・フェアに「JAPAN ブース」を設置した。

設置に至る経緯を簡単に振り返ると、2012年度のICOM日本委員会の総会において、日本への世界大会の招致が議論され、当時の日本委員会の委員長であった近藤信司氏を委員長とする「ICOM 大会招致検討委員会」が組織されたことがきっかけとなっている。検討委員会の報告書で、招致の必要性が確認され、2013年度から委員長となった国立新美術館の青木保館長の下で、引き続き招致時期や開催地を検討することを決める一方で、日本の博物館の状況があまりにも内向きで、世界大会招致に向けては、早急にあらゆる機会を見つけて世界に向けて情報発信を行う必要性が確認された。

リオデジャネイロ大会の概要とともに、大会とともに開催されるワールド・ミュージアム・フェアについても、出展基準や料金が示された。2010年の上海大会でも賑わいを見せていたこのような場で、可能であれば日本の博物館の状況を紹介したいと考えた。出展料は2万リアル（1リアル50円で換算すると100万円）と意外と高額で、日博協の財政状況では難しい状況だったが、幸い、趣旨をご理解いただいた機関や企業の助成や協賛をいただけることとなり、ブースの出展が可能となった。

ブースは、会場の構造や参加者の導線が詳細に把握できないなかで、何とか図面等で検討し、できるだけ参加者の目に触れ易い場所を選んだ。地球の裏側に位置し、ブースの構造やグラフィックの制作手順等、手探りの部分も多く、事務局としては多くの時間と労力を要する作業を強いられたが、出展した効果は確実にあったと考えている。

ブースの壁面スペースを利用した展示では、東京国立博物館をはじめ、日本を代表する博物館を写真で紹介した他、国内の博物館数や利用者数などのデータも紹介した。一方、今回のブース出展を世界大会招致にできるだけ役立てるための工夫も考えた。ICOM日本委員会の事務局である日博協の、主な事業を紹介するための英文パンフレットを作成し、その中に日本が世界大会招致を前向きに検討していることを、「Japan is welcoming the World Museum Community!」「ICOM-Japan is seeking to host the General Conference in Japan」というメッセージで表現したカードを挟み込んだ。そして、日本から参加した青木委員長をはじめとする主要な参加者には名刺を用意し、その裏面にも「Japan is welcoming the World Museum Community!」と書き込んだ。もちろん、世界大会開催地は、立候補から選挙まで決められたルールに従って決められていくプロセスがあり、立候補前の日本が具体的に選挙運動をすることは許されない。しかし、先に掲げた日本の博物館が内向きである課題の改善に向けて、このブースを利用して、広く世界の博物館関係者と交流する場を確保し、そこで、大会招致に対しても前向きに検討していることを伝えた

いと考えた。

実際のブース設置には、在リオデジャネイロ総領事館広報文化センターをはじめ、現地の日本商工会議所にもご協力をお願いして、何とか大会開催に合わせて店開きすることができた。大会期間中は、現地ボランティアの安見えりかさんを中心に、日本からの参加者の方々にもお手伝いいただき、ブースを訪れる世界の人々と交流し、作成したパンフレットの他、持ち寄った資料を配り、名刺も活用して日本の招致検討への思いを伝えた。東京都博物館協議会の援助により参加した五島美術館の名児耶学芸部長は、茶道具とともに茶菓子等を自前で日本から持参され、日本茶のサービスをしていただき、大変好評を得た。

今回、ICOM 世界大会に JAPAN ブースを出してみても、メリットと感じたことが幾つかあった。まずは、出展動機となった、日本の博物館情報の海外発信と海外の関係者との交流については間違いなく効果があった。また、そのなかで、日本が世界大会の招致を真剣に検討している状況を、多くの関係者に伝えることもでき、少なからずの人々から、立候補すれば支持する旨の言葉もいただいた。一方、リオの大会には日本から約 30 人の関係者が参加したが、この参加者にとっても、このブースは、大会期間中の集合場所、会議場所やスケジュール変更等、情報交換のセンター的な役割を果たすことができた。

初めての試みとして、今回のブース出展はある程度の成果を収めることができた。その効果をしっかりと認識し、今回の経験を活かしていけば、次回以降も、大きな成果を期待できる取組であったといえる。

最後に、今回のブース出展にご協力いただいた関係者の方々に改めて感謝の意を表したい。

## 委員会点描

ICOMには31の国際委員会があり、また、その他にも地域連合や専門委員会など、いろいろな委員会が組織されている。委員会によってテーマや規模が異なるため、当然のことながら、実際のセッションの雰囲気なども多種多様となっている。第23回大会において開催された様々な委員会等のセッションのうち、CIMUSET、COMCOL、ICAMT、ICEE、ICMAH、ICME、ICOM-CC、NATHISTの6つの国際委員会と、地域連合であるICOM-ASPAC、それから、ICOMと協力関係にある国際団体Blue Shieldによるセッションについて、報告する。

---

### CIMUSET

International Committee for Museums and Collections of Science and Technology

CIMUSETは、科学と技術の分野の博物館の専門家で構成される。同委員会には、歴史的コレクション等の資料に基づく科学系・技術系の伝統的な博物館だけでなく、青少年向けの科学技術の普及や促進活動を主に行っているような今日的な科学センター等も広く参加している。CIMUSETは年次総会を開催して活動を行っている



ICOM Rio 2013においては、MPR

(International Committee for Marketing and Public Relations)と合同で、「Controversy, Connections and Creativity (論議, 接続及び創造)」のテーマで、報告を中心とする部会がもたれた。今回の会議は、経営や管理部門の責任者による報告が中心となり、そうした経営的活動と日頃かわりのない、調査研究や学習支援の活動を主とする学芸員の参加は難しいように感じられた。今後、この部会のテーマを見極めた上で、管理・経営系のスタッフか、あるいは事業系のスタッフか、どちらの参加が望ましいか判断して参加したほうが良いように思われた。

(折原守・亀井修・川岸哲也/国立科学博物館)

## COMCOL

### International Committee for Collecting

COMCOL（コレクションの収集に関する国際委員会）は、作品の収集と活用の実践、理論、倫理の検討を目的に、第1回の会議を2011年に開催した若い組織である。第3回となる今回のテーマは「現代社会のなかで、既存コレクションの価値を解釈し直し、再利用すること」(The reinterpretation and re[usages] of [older] collections and their value for contemporary society) である。

プログラムは、1日目（8月12日）の午後にセッションI: Collection Between different Ideologies、3日目の午前中にセッションII: Generating new meaning for collections とセッションIII: Sustainable re-interpretations of collections のパネルに計13名が登壇、4日目はマレ美術館（Museu de Maré）に場所を移してワークショップを開いた。2日目は終日、ICMAH（考古学および歴史学に関する博物館とコレクションの国際委員会）、ICME（民俗学の博物館とコレクションの国際委員会）、そしてICOM KOREA と合同で Focus on Collecting: Contemporary Collecting for Reinterpreting [Older] Collections（既存コレクションを再び活用するための現代作品収集）をテーマに発表が行われた（登壇者19名）。

“既存コレクションの活用”というテーマは、モノを収蔵・管理し、活用することを使命とする、いずれの博物館にとっても現実的且つ切実な問題である。これに対する発表は、新たなメディアとしてデジタル技術を使うというだけでなく、既存の収蔵品と現代作品との間に新しい文脈を構築するための工夫やその具体例であったり、モノに新たな価値や意味を与えることについてキュレータを啓発するものまで、多岐にわたった。発表者はベテランの博物館員による活動報告から、複数の博物館活動を分析した大学院生の共同発表まで幅広く、会場では活発な質疑応答が交わされた。

専門性の高い国際委員会が多いなかで、古美術を扱う博物館・美術館の学芸員が、館蔵コレクションやその収蔵に関する問題意識を共有できる委員会が、これまでなかったのが不思議である。本委員会の意義はきわめて大きく、今後のテーマや活動内容が注目される。

（白原由起子／根津美術館）

---

## ICAMT

### International Committee for Architecture and Museum Techniques

ICAMT（建築と博物館技術国際委員会）は、1948年以来、各地でコンフェレンスを開催してきた歴史をもつ委員会で、リオデジャネイロ大会はICAMTにとって39回目のコンフェレンスになる。今回のテーマは Building Sustainable Museum in the Tropics（熱帯地方で維持可能な博物館をつくる）である。

大会のメイン会場となった「市民芸術センター (Cidade das Artes)」は、フランス人建築家クリスティアン・ド・ボルザンパルクが設計した、演劇・音楽・映画などのイベントの開催を行う場となるよう、当初は2004年竣工予定であったが、実際には2013年1月に完成した多目的文化施設である。ICAMTは、このセンターで12日に6本、13日に9本、14日午前中に4本の発表を行い、同日午後には「ルイ・バルボーザの家博物館 (Casa de Rui Barbosa)」(1930年、ブラジルで最初に個人の家を博物館とした施設)、15日は現代美術ギャラリーの「モレイラ・サレス財団 (Institute Moreira Salles)」という異なるタイプの施設を会場にして、研究発表と施設見学を行った。

テーマが示すように、今回のコンフェレンスが目指すのは、開催地ブラジルを含む熱帯地方にある施設が、環境や性能のレベルを向上させることで、博物館施設の世界基準をクリアし、維持継続することのできる品質や技術をもつことを推進・支援することにある。筆者はLED照明に関する発表2本を聴いたが、そのしくみから性能、スペックに至るまで、施設や照明の専門家を対象にした詳細なプレゼンテーションであった。こうした情報や具体的な使用例が、南米の博物館関係者を啓発し、施設に関する諸問題に注意を喚起することになるのだろう。実際に筆者が大会期間中に見学したいくつかの公立レベルの博物館においても、展示環境が旧態依然であり、根本的なレベルでの改善が俟たれる施設がある一方で、最新式の照明や音響装置を整えたスタイリッシュな現代アートギャラリーもあり、急激な発展ゆえに様々な問題を生じていることが窺われた。Sustainability や environmental という語は近年様々な場面で耳にするが、本委員会では、それが概念のレベルではなく、この地における具体的、実務的な問題として議論されたことに意義がある。

(白原由起子／根津美術館)

---

## ICEE

### International Committee for Exhibition Exchange

筆者は、地方博物館国際委員会 (ICR) の会合を中心に、いくつかの委員会を梯子したので、展示交流国際委員会 (ICEE) にはそれほど多くの時間を割くことができなかつた。短い観察の中から感じたことを以下に述べたい。

ICEE は、巡回展のセールスの場ともなっている部分があり、各国の博物館関係者が委員会への参加者に対して立派なパンフレットを配りながら、盛んに巡回展の売り込みを図っていた。研究発表でも、自館の展覧会を紹介しつつ、他館でも巡回が可能である旨の紹介をするなど、売り込みを図る姿勢が強いように感じられた。また、資金調達やPPPなどの問題についても活発に議論するなど、日本の博物館も直面している民間活力導入の問題にも踏み込んでいた。

ところで吹田市立博物館は、国際協力機構 (JICA) 博物館学コースの個別研修で発展途

上国の学芸員を毎年数名受け入れており、毎年筆者が5日間の研修を担当している。例年この研修に参加した学芸員たちは、親日的になって自国へ帰国する者が多い。2013年は7月に5人の学芸員を受け入れたのだが、そのうちの1人でアルメニア人の学芸員とは、彼が日本滞在中からICOMに参加するのでブラジルで会おうという約束をしていた。今回参加し、再会することができたのだが、実は彼は、ICEEの理事になっており、研究発表のモデレーターも務める実力者だった。大会終了後、声を掛けられ、「2015年か2018年にICEEの年次会合を日本で開催することで、日本の大会招致を応援したい」という。日本のICEE会員は5人しかいないが、ICOM日本委員会としても積極的に協力・推進していくべきではないだろうか。博物館3学会からの協力など、実現の方法がいくつか考えられる。また、ICEEからも開催のための予算が多少出るとのことだが、不足分は、国内外の展示業者やメディアなど、スポンサーの協力が不可欠である。これまでのJICAの国際協力による副産物がこういったところにも表れているとすれば、研修に関わる者として大変嬉しいことである。

(五月女賢司／吹田市立博物館)

---

## ICMAH

International Committee for Museums and Collections of Archaeology and History

ICMAHは歴史と考古に関心を持ち、あるいは有形無形を問わずそれらに関する文化遺産を扱う博物館に所属する人々が参加する委員会である。約600の機関と67の国々から参加を得ている。8月12日から14日まで研究発表が行われ、筆者が参加した12日には約60名ほどの参加者があった。グルジア国立博物館における少数民族の文化に対する展示と教育プログラム、ギリシャにおける移民と現地人との文化的な共生など、今回の会議ではマイノリティー、移民など現代的な問題をテーマにした発表が多く見られた。

(神庭信幸／東京国立博物館)

考古・歴史の博物館およびコレクションに関するこの委員会について、筆者は歴史系博物館の職員であるため、以前から関心はあったが、覗いたのは今回が初めて。会場はROOM18というかなり大きな部屋だったため、出入りはしやすかった。

実際に出席したのは8月14日(水)で、今回のテーマ「大西洋における奴隷交易」についての諸報告があった。ICMAHのプロジェクトとして共同研究的に行っているもののように、アフリカ、中東、オランダなどからの報告者があり、どちらかという、博物館というよりも、奴隷交易の事実や関係地の遺跡や記念碑設立の経緯、といったものが多かったが、関係国に謝罪させて記念碑を作った、という話や、アムステルダム博物館では、市内のどの家が実際に奴隷を使っていたか、といった市民レベルでの奴隷制を考えようとする

展示の試みなどが紹介され、奴隷交易を行った国々と被害を受けた国々との間では、この問題は未だに過去のものではないことが実感され、博物館の社会的役割としても考えさせられるものがあった（後日訪問したブラジル国立博物館の展示でも非常に批判的に扱われている）。ただ、歴史をどう展示するか、という歴史博物館の本来の課題には直接つながりにくいテーマを扱っているようにも思えた。



この他、タイの博物館から、観客に対する展示の教育的配慮についての報告もあり、博物館的な報告ではあったが、今回の中では浮いた感じがあり、個人的にも話のできたので、一昨年日本で第1回を開催した、CECA（教育と文化活動委員会）のアジア太平洋地区集会に参加するよう、お勧めしておいた。出席者数は、出入りがあるが、およそ20～30人程度。

午前中の報告は、予定されていた4本の内、2本は報告者が現れず代読、という状態で、運営に関する会議（board meeting）も少しだけ覗いたが、委員会の運営に関してはかなり問題もある様子であった。

技術的な面でも、同時通訳がポルトガル語とフランス語しかない（フランス語圏の報告者が多かった）という事態になりかけ、またレシーバーの質が悪くて非常に聞き取りにくい（そもそもどこで借りられるのかも案内がなかった）など多くの問題があり、日本で行うならば、当然ながら、このような点は、利用者の視点に立って最大限の配慮を行うべきである。

ICMAHの集会としては、この他、COMCOL、ICMEH、ICR、およびICOM Koreaとの共催で、“Contemporary Collecting for Reinterpreting (Older)”という集会が大ホールで13日に行われ、少し覗いてみたが、韓国の現代史関係博物館の事例報告だった。歴史博物館の問題としては意味があるテーマだが、韓国の事例紹介だけをこのような全体会として聞くのは少し違和感があり、参加者も多くなかった。ただ、会場では、ICOMソウル大会以後の韓国博物館についてのレポートも配布されており、ICOM大会を行ったことによる国内での博物館の変化や、ICOMとの関わり方の変化、といった点では興味深い点もあると言えよう。

（小島道裕／国立歴史民俗博物館）

## ICME

### International Committee for Museums and Collections of Ethnography

今大会では、日本渡航歴が豊富で、親日派として知られる英・レスター大学のヴィブ・ゴールドディング先生が民族学の博物館・コレクション国際委員会 (ICME) の委員長に就任した。委員会では、45 人程度の少人数で研究発表を行っていた。会場を見回したところ、おそらく 45 人中 30 人程度が少数民族を研究対象とする欧米の多数側に属すると思われる人々、15 人程度が少数民族や研究対象とされる当事者側の人々であったように見受けられた。少数民族などの 15 人程度のうち半数以上が発表をしており、単純化すれば、多数側の人々が少数側の人々の発表を聞いているような構図が生まれていたともいえる。民族学の博物館・コレクションのあり方を議論する博物館人類学は、展示をつくる際の当事者参加を重視しており、重視しなければ、学問としても民族学博物館としても、生き残っていけないという危機意識を持っている、といったことを象徴的に表している構図のように思えた。

このような考え方は、吹田市立博物館のような地域博物館に引きつけて考えることもできる。つまり、地域博物館の運営の様々な面への当事者としての市民の参画でも似たような構図が描けるのではないかと思うのである。その意味で、筆者が発表をした地方博物館国際委員会 (ICR) の動きとも共通性があり、また ICOM 自体が、非西洋諸国出身の参加者も多いという背景から、会議としてそのような性格を帯びているようにも考えられる。

なお、大会期間中、ICME は丸一日を使って COMCOL、ICMAH、ICR、ICOM Korea との合同セッションを開催した。

ICOM Korea からの参加者数は今回 20 名程と思われるが、複数の国際委員会との合同セッションを開催するあたり、大会招致を目指す日本にとっても、国際的なプレゼンスを高めるための一つの方策として参考になった。

(五月女賢司／吹田市立博物館)

---

## ICOM-CC

### International Committee for Conservation

ICOM 大会に参加したのは今回が初めてで、これまでは、大会とは別に 3 年毎に世界各地で開催される保存委員会 (ICOM-CC <http://www.icom-cc.org/home/>) に参加してきた。ICOM-CC には 21 もの分科会があり、約 2,000 人の会員を抱える ICOM 国際委員会の中では大きな委員会で、分科会には以下のものがある。

- Art Technological Source Research
- Documentation

- Education and Training in Conservation
- Ethnographic Collections
- Glass and Ceramics
- Graphic Documents
- Leather and Related Materials
- Legal Issues in Conservation
- Metals
- Modern Materials and Contemporary Art
- Murals, Stone, and Rock Art
- Natural History Collections
- Paintings
- Photographic Materials
- Preventive Conservation
- Scientific Research
- Sculpture, Polychromy, and Architectural Decoration
- Textiles
- Theory and History of Conservation
- Wet Organic and Archaeological Materials
- Wood, Furniture, and Lacquer

今回の ICOM 大会参加の目的は、ICOM-CC が大会の場でどのようなミーティングを行うのか、そしてその他の国際委員会がどのような発表を行うのかを見聞することであった。8月14日に行われた発表は発表者と内容の多様性を重視したもので、保存に関する諸課題がナイジェリア、フィリピン、ギリシャ、米国、エジプト、ブラジルから提示された。来年オーストラリアのメルボルンで開催される3年毎の大会では総ての分科会でかなりの量の発表が予定されている。一方、イコム大会の期間中1日だけのセッションでは発表件数は限られるため、多様性に的を絞ることで、ICOM-CC 全体の性格を初めて参加する人々に少しでも理解できる様に工夫した内容と言える。それでもやはり参加者は多かったように思う。最後に参加者全員により環境変動と博物館について議論を深めた。参加者は100名程度で、分科会の座長はニューヨーク・メトロポリタン美術館のリサ・ピロシさん、研究発表の座長はオーストラリア・アウスヘリテージ代表のピノッド・ダニエルさん。

プログラムは以下の通り。

9:00–9:20 welcome and introduction

Lisa Pilosi, Chair, ICOM-CC

9:20–9:40 Keynote: “The Role of the Federal Attorney’s Office in the Protection of the Cultural Heritage in Brazil”, Zani Cajueiro Tobias de Souza (Federal Attorney’s Office , Minas Gerais, Brazil)

- 9:40–10:00 “Making the Case for Conservation: A Tale of Two Languages”, James Janowski (United States)
- 10:00–10:20 “People, Passion, Proficiency: The Cebu Provincial Government’s Investments in Heritage Conservation in Cebu, Central Philippines”, J. Eleazar R. Bersales (Philippines)
- 10:20–10:40 “The Value of Conservation in the Twenty-First Century: The Nigerian Story”, Ogechukwu Elizabeth Okpalanozie (Nigeria)
- 10:40–11:00 “What Effect Does the Conservation of Heritage Have on Society at Large?”, Martha Richter (United Kingdom)
- 11:00–11:20 “Conservation Ripples”, Michel v. Roggenbucke, Maria Mertzani, Christina Desalermou, and Anastasia Katsidima (Greece)
- 11:20–11:40 “Professional Networking and Creative Conservation in the Historic City of Taiwan”, Mei-Fang Kuo and Shiann-Far Kung (Taiwan)
- 11:40–12:00 discussion
- 13:30–13:50 “Conservation through Communication of Public Art”, Ingrid Grytdal Matheson and Christina Spaarschuh (Norway)
- 13:50–14:10 “Building Preservation in a Political Institution”, Juçara Farias and Gilcy Rodrigues Marques (Brazil)
- 14:10–14:30 “A New Egyptian Museum: Its Role and Activity in the Africa and Middle East Region”, Yasunori Matsuda, Kaoru Suemori, Hussein Bassir, Hussein Kama, Mohamed Atwa, Said Shebl, Osama Abo el Khair, and Vinod Daniel (Egypt and
- 14:50–15:30 Open forum on environmental standards in museums globally

(神庭信幸／東京国立博物館)

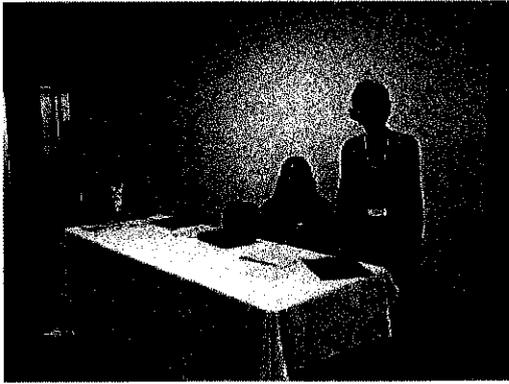
---

## NATHIST

International Committee for Museums and Collections of Natural History

NATHIST は、自然環境におけるのと同様に博物館コレクションにおける生物多様性の保全、世界の自然遺産の科学的研究や博物館の展示を通じた広く公衆への教育、会議、野外活動等に関わる委員会である。

ICOM Rio 2013 においては、全日程にわたる研究発表や会議プログラムと、NATHIST ディナー会議など NATHIST 委員会独自のプログラムももたれた。今回は特に ICOM NATHIST Ethics Working Group (<http://icomnatistethics.wordpress.com/>)によって作成



受付



発表

された自然史の倫理規定についての報告があった。科博からも亀井が「Natural History Museum Materials as Cultural Assets」のタイトルで関連する報告を行った。同倫理規定の全文は、[http://icomnatistethics.files.wordpress.com/2013/09/nathcode\\_ethics\\_en2.pdf](http://icomnatistethics.files.wordpress.com/2013/09/nathcode_ethics_en2.pdf)で見ることができる。

会議の場所には委員会の代表者が常駐し、受付もメンバーの持ち回りで家族的な雰囲気で行われていた。参加者それぞれが「馴染み」といった感じであり、自然史系博物館の学芸員であれば比較的参加しやすい雰囲気があった。

日本国内のみならず、ICOM の構成メンバー的にもこの分野の会員の割合は多くはないが、我が国のプレゼンスを高めていくうえでも当委員会への今後のかかわりを継続して強めて行く必要があるものとする。

(折原守・亀井修・川岸哲也／国立科学博物館)

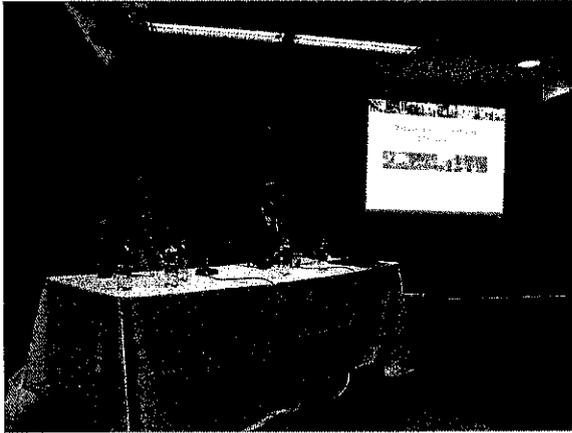
---

## ICOM-ASPAC

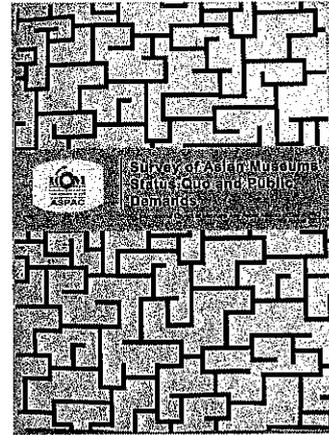
International Council of Museums Asia-Pacific Alliance

ASPAC は、ICOM 組織下の 5 つの地域連盟 (Regional Alliances) の一つで、アジア太平洋地域の 24 の国内委員会が所属している。現在、委員長 (Chairperson) は中国の Dr. Song Xinchao (宋新潮；国家文物局副局长) で、事務局は中国博物館協会に置かれている。そのせいもあってか、中国人の参加が他の委員会等に比べて実に多く、英語が堪能でないためコミュニケーションが十分にとれず、ややまとまりのない会合のような印象を受けた。

委員長からの報告も中国語からの通訳であったが、それでも中国国内の博物館政策の進展とあいまって ASPAC としての様々な事業を展開しており、2012 年 9 月には武漢で大会を開催し(折しも尖閣問題の影響により、日本からは 1 人のみの参加にとどまった。)、2013 年度は “Survey of Asian Museums’ Status Quo and Public Demands” (Preliminary Stage) を取りまとめ、英語版及び中国語版の報告書を配布した。第 1 段階として中国国内



Hans Martin Hinz 会長（左）と宋新潮委員長



Survey of Asian Museums'  
Status Quo and Public Demands

のみを対象としたアンケート調査であったが、2014年度には第2段階として ASPAC 加盟の24か国を対象としたアンケート調査を行う計画があるという。

ICOM 会長の Dr. Hans Martin Hinz 隣席のもとで役員選挙が行われたが、段取りが十分でなかったこともあって、少々混乱の末、宋委員長が再任され、役員も8人（前委員長の Inkyung Chang を含む）が全員再選、新たに立候補した筆者も当選し、Board Member になった。

総会后、第1回役員会が開催され、マレーシアの Janet T. S. Mooi 及び筆者が副委員長 (Vice-Chairperson) に、フィリピンの Gina Barte が書記 (Secretary) に選出された。また、ICOM におけるアジア地域の重要性を認識し、さらなる専門性の向上と会員の増加に努めることや、ASPAC 加盟国同士の連携を強化し活動を促進させること等を確認した。また、日本が2019年の ICOM 大会開催に名乗りを挙げてことも評価された。残念ながら ASPAC の事務局は必ずしも十分に機能しておらず、ASPAC のホームページも機能していないのが現状だが、2019年の ICOM 大会に向けてさらなる連携を図っていく必要がある。

次回の ASPAC の大会は、2014年11月にインド・ニューデリーで、2015年にはフィリピンで開催される予定である。

(栗原祐司／東京国立博物館)

---

## Blue Shield

Blue Shield は今回、災害救援タスクフォース (Disaster Relief Task Force) との合同セッションを開催した。Blue Shield 関係の研究会は日本でも2012年から2013年にかけて2回開催されているのでその存在はよく知られているのではないかと思われる。もともと文

文化財を戦争被害や戦争による混乱時の盗難から守るために発足した経緯があるが、近年は自然災害から文化財を守る活動も展開している。今回の合同セッションでは、Blue Shieldの組織や活動紹介、事例発表など、これから取り組みを始める国のために概要を紹介し、Blue Shield 国内委員会の設立などを奨励する内容の発表が多かった。

日本では戦争というよりは、やはり自然災害や火災からいかに文化財を守るか、ということが特に重要な課題であるし、最近では局地的な課題として原発汚染から文化財を守る、という重いテーマもある。このようなこれまでの経験から、NPO や大学を含め、それらを国際的にも生かす能力が日本にはある。しかし、日本はそれぞれの活動が独自に発展してきた要素が強く、能力は高いのにそれらを効率的・効果的に取りまとめるという点において不十分なところが見受けられる。今後はそれぞれがこれまで培ってきたものをまとめていく国の機関として、文化財の防災・救出センター（国内活動用）やそこを事務局とする Blue Shield 国内委員会（海外活動用）を立ち上げる必要があるだろう。2014 年には、アメリカ博物館同盟（AAM）などでこのことについて発表の機会もあるため、そうした場で日本の国内委員会立ち上げのための動きを紹介することで、日本の積極的な取り組みを国際的に知ってもらうことも意義のあることであろう。

なお、合同セッションでは、国内委員会の立ち上げのための「スターティング・キット」があることも紹介された。そうしたものを活用して、日本でも数年以内に日本委員会が立ち上がればと願っている。

（五月女賢司／吹田市立博物館）

イコム大会報告書  
(第23回 ブラジル・リオデジャネイロ大会)

---

発行 平成26年3月  
編集 イコム日本委員会  
東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館  
Tel 03-3591-7190  
印刷 社会福祉法人 恩賜財団 東京都同胞援護会